

特 222

870

童 兒

案 教 育 教 和 融

會 協 業 事 和 融 央 中 法 財
人 團



始



特222
870



兒童
融和教育教案



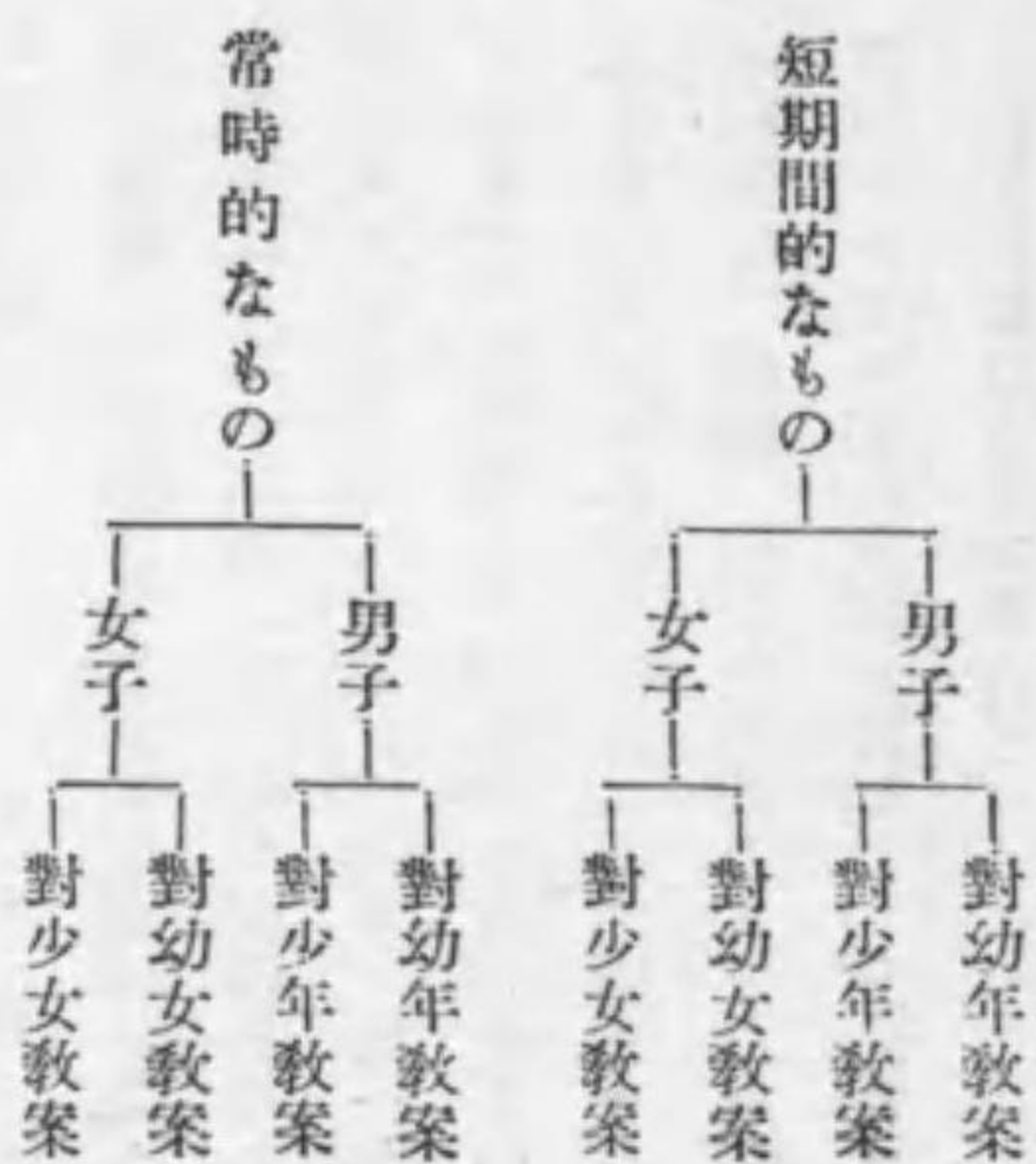
本書は當協會囑託講師藤範見誠氏に依
囑して執筆を請ひたるものなり。

昭和七年五月

財團 中央融和事業協會
法人

序

- 一、本教案は、第一部と第二部とからなる。
第一部は短期的な方法に於ける教話を中心とせるものであり、第二部は常時的な方法に於ける訓練を中心としたものである。
- 随つて第一部は小學校融和團體等に於ける一般兒童融和教育に適し、第二部は所謂内部兒童のカルトをねらふところのものであるから青年融和運動の組織者たちの手による自主的教育に適するやうに出来てゐる。
- 併し無論、その兩者に自然的な關係を保たせるやうには考案してゐる。
- 二、本教案は、第一部第二部、各六教課を持ち、全十二教課を十二ヶ月に配して、なるべく自然との調和を保たせるやうに考案してゐる。第一部第一教課は四月に始まり、第二部第六教課は三月に終る。
- 三、本教案は、尋常四五年程度に考案したものである。随つて下級生上級生の場合、可然、内容、表現を變化させる必要のあることは論をまたない。
- 四、本教案は、無論、理想的意圖のもとに執筆したものでなくて、困難と稱せられてゐる兒童融和教育のサンプル的な教課を羅列して見たにすぎぬ。理想的な教案としてならば、凡そ左の複雑な内容を持たねばならぬであらう。



- 五、本教案は、児童に與へる教科書代用、ピクチュア・カード（はがき二枚大、両面三度刷）を併用することによつて、適實な効果をあげ得るであらう。（繪の準備、並に印刷費の關係上、未だ製作にまで進み得ないことは残念である）
- 六、本教案を採用するゝ場合は『融和事業研究』第十六輯、第十七輯所載の拙稿『兒童融和教育に關する研究』御参照を願ひます。

第一 部

第一 教 課

【目的】

本教課は、生れるところの如何によつて、差別のあつてはならないことを教へるのが目的です。

【注意】

始めて児童に對する時は、極めて周到な用意が必要です。態度、服裝、言語、あらゆるものが全児童の注意的になつてゐるのです。一寸した事が、不信の原因になり、哄笑、失笑の原因になりやすいものです。

そして始めに一度、悪い影響をあたへた時は、決して恢復は出来ませぬ。それがため、次回々回の働きが何にもならぬ事が多いのです。

それから、第一回は充分注意と興味を持たせるやうにしなければなりません。

【第一話】

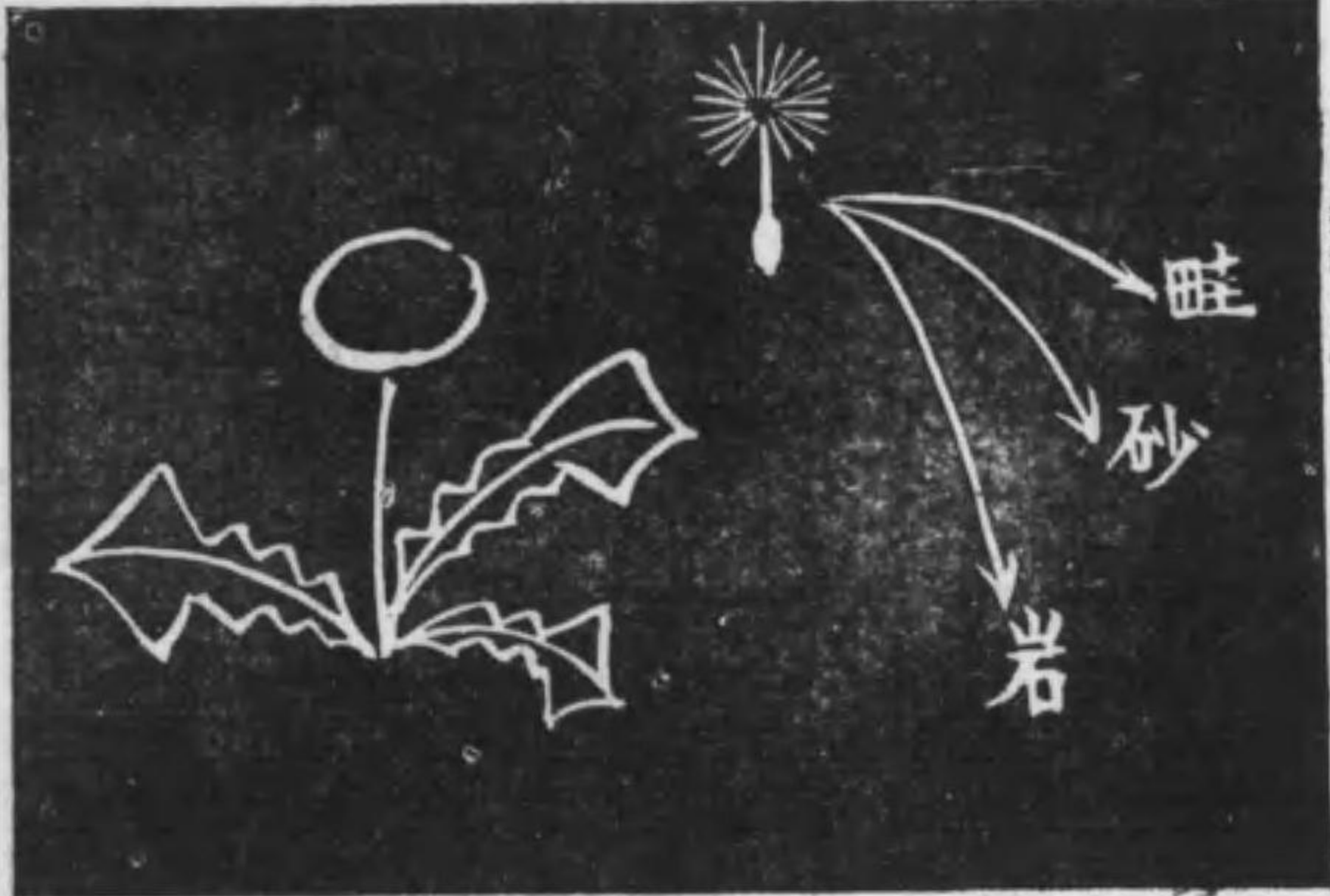
此の頃——春の野原は、とてもきれいです。

ゆるやかに水の流れる小川の堤には、紫のすみれ、赤いれんげさう、小人のむきわら帽子のやうなたんぼゝが、まるで絹織物をしきつめたやうです。

上級生には種子の撒布についての種々な實例を説くことが必要です。

挿圖は特に誰にも描けるやうに、専門家の手をわづらはさずに素人以上の素人である筆者が全部かきましたほんとうは利用者各位の手によつてもつと美化されたものです。

話を急に轉換させて、興味をかへてゆくことは必要です。



そのたんぼの白い坊さん——種子になつたのがあります。(黑板に挿繪Aを描く) 風が吹くと、飛行機のやうに、ふわり〜と種子が撒布してゆきます。二十三十の飛行機が、畦を越えて、あちこちに落ちるのです。

そして、やがて、春がめぐつて来ると、其所で芽をふき花を開くのです。

よく肥えた畦に落ちたものは幸福です。丈夫に元氣にのびます。が、さら〜の砂の上、繁つた樹のかけのものは弱くひよろ〜とより伸びません。大きな岩の上のものは根を下すことさへ出来ません。困つたものです。

岩の上、樹のかけに落ちやうと願ふ種子はないのですが風などの關係で、仕方ないことです。種子が悪いのだと言つていゝでせうか。

皆さん。あなたたちは、今、幾歳ですか。何年生れですか。(二三の兒童に、歳、又は生年月日などを聞く。)

十一年前、十二年前に、おぎやあと生れて来た時、皆さんは、自分の生れて来た家を知つてゐたでせうか。自分の生れて来た村のことを知つてゐたでせうか。どの家

問答ははつらつと行はれねばなりません。

板書は必ず楷書でなければなりません。

板書したものならば各兒童に筆記せしめること。『賤しい』といふ文字には假名を打つこと。

體操の時は、特に元氣な聲でなければなりません。

に生れて来やうとか、どの村に生れて来やうなど、少しも考へてゐなかつたでせう。生れて見ると其所に自分のお母さんがきまつて居り、自分の家がきまつて居り、そして自分の村がきまつてゐたのでした。

さうして生れて来た人間を——あの村に生れたから、あの字に生れたから尊いとか尊くないとか、そんなことは決して言へない筈です。

生れて来た赤ちゃん、何にも知らなかつたのです。一樣に、雪のやうに白く美しい心で生れて来たのです。そして、おなじやうにお父さんやお母さんに可愛がられ乍ら、大きくなつて来たのです。

——その私たち、人間と人間との間に、どうして差別があつてなりませう。さあ、それですから、此の事をよく覚えて下さい。

「人は生れたところによつて尊い、賤しいといふ區別はありません。」

—(以上、板書)—

【體操】

みなさん！一度立つて下さい。長い間、座つて聞いてゐたので、足が痛くなつたでせう。さあ、足をよろこばせてやりませう。

『もつと元氣に』
といふ聲と共に指
導者も、より大き
な聲を出す。

手を腰！ (用意)
かかとをあげるツ！
すねをまげる。
すねをのばす。

かがとを下げる。――
わかりましたね。みんなで一二三四と號令をかけて。
はい、始め！ もつと元氣に！ (五六回くりかへす。)

(1) 操體



さあ、これで足の方はよろこんでゐます。今度は、首の運動。……一所懸命、お話を聞いてゐたから
首が少しつかれてゐます。それをなほしませう。
用意で手を腰。
首を左にむけて一二と、首のすちを伸す。……今度は右にむけて三四と全じやうに。
はい、始め！ (各三回づゝ繰返す)

(2) 操體



これで、頭がすつきりしました。静かにお座り！
胸に手を置いて。
静かな深呼吸五回――はい。
もう少し静かに……。

【第二話】

深い深い山の奥です。
大きな湖が、あけくれの行く雲を静かにうつしてゐます。
時にはあやしい鳥が、ききツ！ と異様な聲を立てゝないてわたるほか、湖には、さゝ波一つ立ちま
せん。湖の面は、まるで鏡をはりつめたのではないかと思はれるほどです。
――併し、誰れでもです。ほのぼのと、東の空の白まぬうちに、この堤に立つて凝乎と待つてゐたら
湖の面は、さぶん！ と一度だけ、一日中でたゞ一度だけ大きな音を立てます。
あけの明星の、かすかな光りに、すかして御覽なさい。銀のやうに神々しく光る長い髻びんをなでながら

深呼吸は肺を強健
にすると共に、體
操によつて、稍、
散漫になつた心を
沈静せしめる効果
を持つ。

さうです、七十か八十位のお爺さんが元氣に水を汲んでゐるのです。

それは毎日、きまつた時間です。

あとをついて行つて御覽なさい。細い山路をうねり、うねり、もう一度うねりとうねると、其所に見すばらしい小舎があります。

小舎の中には、三人の男の子が、すやすやとねむつてゐます。中の一人が、ほゞ笑んでゐるのは、何か楽しい夢でも見てゐるのでせう。

お爺さんは、その三人の寝顔を一通り眺めると、満足さうに朝の仕事にかゝります。

それが毎日のことです。

それに——昨日、いゝえ、一昨日から水を汲むお爺さんの姿が、湖のほとりに見えなくなつて仕終ひました。

どうしたのでせう。

今朝は、二人の男の子が重さうに水を汲んで行きました。小舎で待つてゐる一人の子も、とても心配さうな顔をしてゐます。

ほんとに、どうしたのでせう。……あの元氣であつた白髪のお爺さんが、ぐつたりと横たわつてゐるのです。

病氣！

三人の子供たちの心配さうなもの無理はありません。

やがて、お爺さんは三人の子供たちを枕もとへよびました。

「わしは、もうお前たちとわかれねばならぬ時が来た。あす、元氣なお陽さまが、東の山に昇り始めた時、お前たち三人は、何所へでもいゝ、旅立つのだ。そして、一ばん最初に出會つた人のうちへ引とられて行けばいゝのだ。それが、お前たちのほんとうのお母さんなのだ。わしの用事は、もうすつかりすんで仕終つた。では、元氣に行くのだよ！」

そして、しばらくするとお爺さんは、やすらかな息をひきとつて仕終ひました。

三人は非常にかなしみました。

併し、朝になれば旅立つのだ、旅立てば、ほんとうのお母さんに會へるのだと、思ふと、新しい希望が、自然と胸にわいて來るのでした。

「では、お爺さん、さようなら」

墓場におわかれをした三人は、朝日の昇るのを待つて、いつの頃から住みなれたのか、随分長い間の住家をあとに立ち出でました。

「僕は東へ行きます」

「僕は西へ行きます」

「僕は？ 南へ行きますせう」

「さようなら」

「さようなら」

「いゝお母さんに出會つて下さる」

「あなたも！ では、さようなら」

三人は、おの／＼思つた路に一足二足進みました。

「あの——」と、南の路の子は立どまつて言ひました「三日目にみんな此所へかへりませう。出會つたお母さんといつしよに——。そして、御恩をうけたお爺さんのお墓にまわりませう。」

「ああ、それはいゝことです。三日目のおひるに、きつと此所へかへりませう」と二人は言ひました。そして、もう一度、さよなら、をくりかへして袂れたのでした。

東へ行つた子は、そのお晝頃、きれいな御殿の前にとどりつきました。と、中から、立派な着物を着飾つた人が出て來ました。思はず

「お母さん！」

と叫びました。お母さんは、ほんとに待ちかねてゐたのでした。

西へ行つた子は、そのあくる日、馬車に乗つた女の人に出會ひました。

「あゝ、これが、始めて會ふ人だ、私のお母さんだ！」

そして、その馬車にのつて、明るく燈のついた家に、楽しさうな家にたどりつきました。

南へ行つた子は、一日、二日、三日と、へとへとになるところまで歩きましたけれど、誰一人に合ひません。

「あゝ、僕にはお母さんが無いのか知ら？ もう晝が來るのに、みんなと合はねばならぬ約束の時が來

るのに……」

仕方がないので、とぼ／＼と湖の袂れたところ、會ふ約束をしたところをさして、歩いてゆきましたと、路ばたに、苦しさうなうめき聲がします。近よつて見ると、女の乞食！ 「はッ」と思ひましたこれが自分の母さんになるのだと思ふととてもたまらないのでした。

が、仕方ありません。二人に會ふのはづかしいと思つたけれども、その乞食を背負つて、湖のほとりへまで來ました。

うつくしい着物をきかざつて、馬車にのつて、二人は、しあはせさうに、南へ行つた兒の來るのを待つてゐました。

が、乞食を背負つて來た子を見ると、二人の顔には、冷いあざ笑ひが浮ぶのでした。

南へ行つた兒は、かなしくなりました。自分は何で、こんな不合せなのか知ら、と、つく／＼かなしくなりました。

東へ行つた子は西へ行つた子に言ひました「早く、お爺さんのお墓に参りませう」

西へ行つた子は元氣にうなづいて、お墓の方へ進みました。

「僕は、お爺さんにお禮を言ひに行つては悪いのですか」と、南へ行つた子はかなしさうに言ひました二人は顔を見合せてから、言ひました。「お爺さんはきつと、そんな乞食のお母さんなんかの子には會ひたくないでせうよ」

そして、二人は、さつさと行つて仕終ふのでした。

湖から細い路を、うぬり、うぬり、もう一つうぬり廻つたお爺さんのお墓——それを、どれほどたづねても二人にはわかりません。

「あゝ、困つた、何所だつたらう」

二人は一生懸命に探しましたが、どうしても判りません。

「三人でつくつたお墓だ、三人で探さねばならないのだらう」

西へ行つた子は、さう思ひました。で、南へ行つた子をよびました。

「——また、あの乞食の女を見なければならぬのですか」

と、西と東へ行つた子のお母さんたちは顔をしかめました。

……三人でたづねると、すぐお爺さんのお墓がわかりました。

東へ行つた子が、お母さんに手をひかれて先づ進みました。

「お爺さん、長い間、有難うございました。僕は、いゝ母さんに出會つて、いつしよにお禮に参りました。」

すると、お墓の土から、ぱつと一本の白百合が咲きました。白いひげのお爺さんが、うれしそうに笑つた顔のやうに神々しい白百合が。

今度は、西へ行つた子がお母さんに手をひかれて進みました。

「お爺さん、長い間、有難うございました。僕は、いゝ母さんに出會つて、いつしよにお禮に参りました。」

今度も、全じやうに、白い百合が、ぱつと咲きました。土の下でお爺さんはよろこんでゐるのでせう。南へ行つた子は、きたない乞食のお母さんを背負つて進みました。東へ行つた子も、西へ行つた子も、きつとお爺さんはいやに思つて、へびかがまを追ひ出すに違ひないと考へてゐました。

「お爺さん、長い間、有難うございました。僕は、僕は………」といつて南へ行つた子はためらつてゐましたが、考へて見ると、天地の間にたゞ一人よりないお母さん、どうして、よいお母さんと言はずに居れませう。で、力強く言ひ切りました「いゝお母さんに出會つて、いつしよにお禮に参りました。」すると、東へ行つた子も西へ行つた子も、そのお母さん達も、くすり／＼と笑ひました。

が、御覽なさい。お墓からは、純白なうつくしい、お爺さんのよろこびのしるしである大きな百合がぱつと咲いて出たではありませんか。そして、今の今まできたない乞食の女に見えてゐたお母さんが、まぶしいやうなきれいなお母さんに變つて仕終つてゐるではありませんか。

——どこからともなく嚴かな聲が聞えて來ます。「お母さんのね、うちはみんな同じだ、生れたところのね、うちはみんな同じだ！」

東へ行つた子も、西へ行つた子も、そのお母さんたちも、今迄の自分たちの考へを非常にはづかしく思ひました。そして南へ行つた子と、しつかり手を握り合つて言ひました。

「人は生れたところによつて、貴い賤しいといふ區別はありません」

【設問】

大變面白かつたでせう。さあ、一寸おたづねします。

児童たちの氣分の如何によつては、第一回は問ひを發しない方がよいかも知れません。

南へ行つた子を、なぜ笑つたでせう。(お母さんに變りはないのに、みすばらしい風姿をしてゐるだけで、まるでお母さんが悪いのだと考へたからです、といふ風な答にまで導くやうにする)
お爺さんの墓から、おなじ白い百合が咲いたわけは？(お爺さんは、お母さんのねうちにかわりのないことを知つてゐたからです、といふ風な答にまで導くやうにとめる)

【宿題】

皆さんは大變、靜かに、そして一生懸命に、お話を聞いて呉れましたね。今度お話に来るときは、もつともつと面白いお話と、そしてお唱歌とを教へませう。楽しんで待つてゐて下さい。

そのかわり、今日、お話を聞いて考へたこと、思つたことを、どんな紙にでもいゝから書いておいて下さい。思つたことを思つたまゝ、少しもかざらずに——。いゝですか。お約束をしましたよ。わかつた人、手をあげて下さい。

【備考】

(一) 第二話は、少し神秘的でありすぎますが、筆者は實演の結果、そのまゝでよいと信じて改めませんでした。が、下級生上級生には、ある程度までの手心が必要でせう。

(二) 釋迦は王城に生れた、基督は厩うまやで生れた、けれども二人は孔子と共に世界の三聖になつた、といふ例を上級では話して下さい。

第二教課

【目的】

本教課は、職業の如何によつて、差別のあつてはならないことを教へるのが目的です。

【注意】

第一教課の時に約束した『感想文』を適當な児童數名に集めさせねばなりません。

次に漸次に親しい態度をとつて行くやうにすることを忘れてはなりません。

また本教課中の『職業』のはなしは、直接児童の父兄の職業に支障ありと認められる時は、適當に更改されねばなりません。

【第一話】

柳並木の堤の上を、燕がすい〜と飛び交つてゐます。何のために、あんなにいそがしうに飛びまわつてゐるのでせう。知つてゐる人は手をあげて下さい。大分大勢の手があがりましたね。……巢をつくるために働いてゐるつばめもあります。巢に待つてゐるひなに、えを運んでゐるつばめもあります。みんな、自分のお仕事に一生懸命なのです。

自分の仕事に、せいを出さないほどつまらぬことはありません。せいを出してやりさへすれば、どんな仕事でも、仕事のね、うちは同じことです。

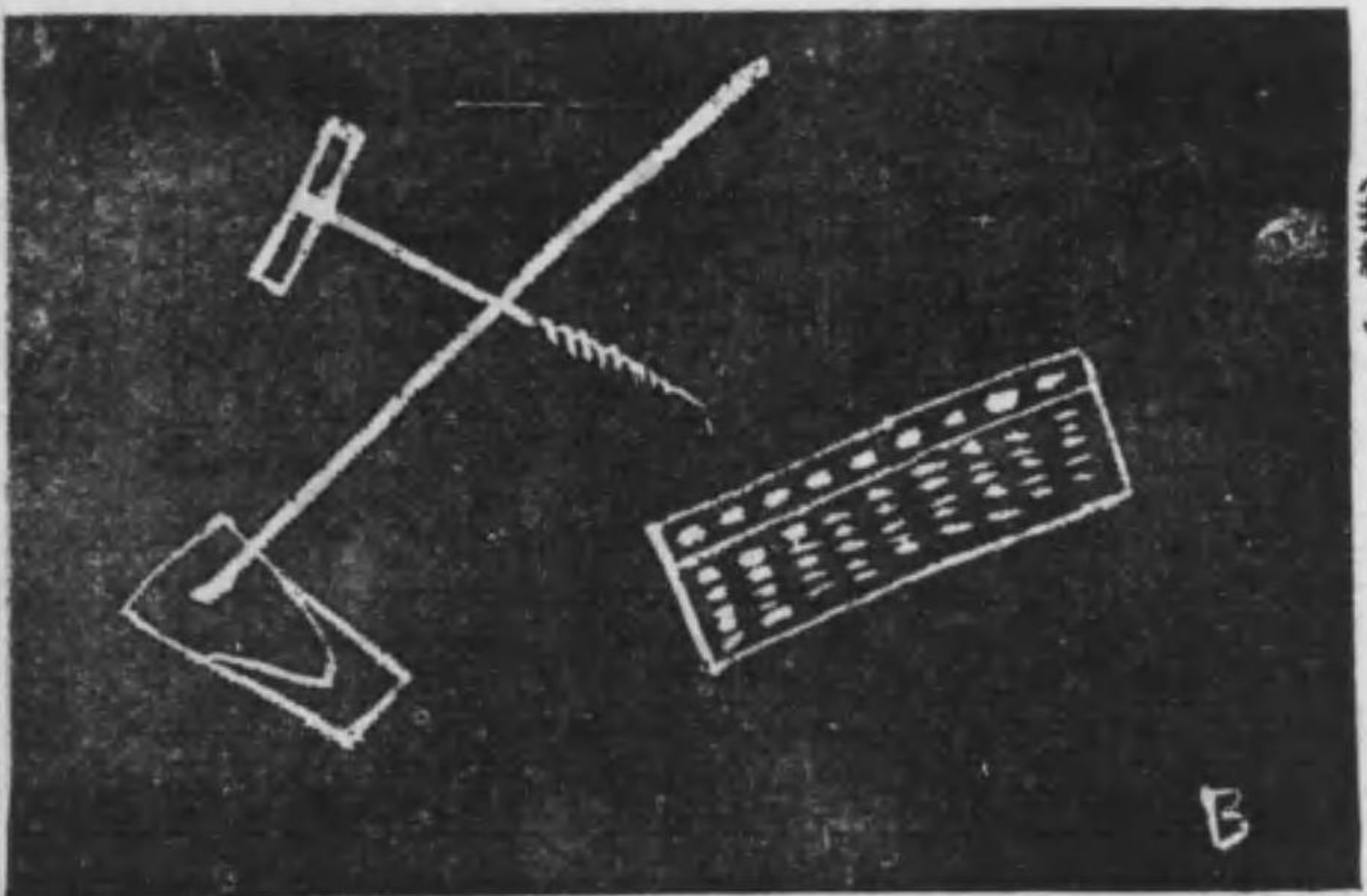
時間の始めに、一々質問してゐることは、氣分をこわしますから、すぐこちらから、答へを出して仕終ふ方が効果的です。

感想文を書いてない児童に對しては次の集りまで必ず書いて来るやうに注意をする必要があります。

みなさんのおうちの仕事は何ですか。(三四の児童にきく)

農業、商業、大工さん。俵やさん。

(挿繪B)



いろいろありますね。中には役人や先生のおうちもありません。そのうちのどのお仕事が一番尊いか。——職業に貴賤なし——おしごとに、尊い仕事、賤しい仕事はないのです。一生懸命にやりさへすれば、みんな同じことなのです。どのお仕事も、なければならぬ尊いお仕事なのです。此所に鉋があります。(B圖を描きつゝ)これは何ですか。大工さんの使ふ穴をあける道具、ぼうとうですね。今度は二二天作の五、二進の一十の算盤です。

田甫へ出る時は、鉋が一本大切です。おかんじやうをする時は算盤でなければ出来ません。商賣人がぼうとうをさげて歩いてゐても何にもなりません。算盤には算盤としての、鉋には鉋としての、各々、使用途があります。算盤がよくて、鉋がわるい、鉋がよくて、ぼうとうがわるいといふことはないわけです。

あの人は、あんな仕事をしてゐるから、此の人は、こん

職業といふ文字に
しごと、と假名を
うつこと。

號令、其の他の要
領は第一教課の通
り。

な仕事をしてゐるからといつて、賤しめるといふことは、大きな間違ひであります。また、自分の家はこんな仕事をしてゐるからはずかしいなど考へることも間違ひであります。正直に一生懸命にする仕事には、決して尊い、賤しいといふ區別のあらう筈はありません。だから皆さん、此の事を覚えて下さい(以下板書)

人は

その職業によつて

尊い、賤しいといふ

區別はありません。

さあ、みんなで一しよによんでみませう。——(むちで文字を指し乍ら、全児童にゆるくとよませる)

【體操】

體操(1)(2)を行ふ。(前教課参照)

さあ、今日は、もう一つ新しい體操をやつて見ませう。

用意で兩足をひらく。

始めツ！ 左の手を上にあけて一二と號令をかけながら、上半身を右に二回にたほす。三四の號令では右手を上上げて前と同じやうに。さあ、用意！ 始め！(四回繰り返す)

胃腸を強健にする
運動。

(3) 操 體

用意



静かな深呼吸を五回。

【音 樂】

これからお約束通り、お唱歌を――。これを配つて下さい。(前の方の五六人に、左の唱歌の體寫又は印刷したものを漏なく配布させる) もらはない人ありませんね。

よんで見ます。(歌詞をよむ)

曲はむつかしいのですよ。よく歌へるか知らず。(笑ひ乍ら)併し皆さんはとも上手だからすぐ覺えるでせう。私が歌つて見たら、はッはッは、と、笑ふほど覺えやすいかも知れません。(歌ふ) さあ、これなら、すぐ歌へるでせう。幼稚園みたいですからね。元氣に歌ひませう。さあ、一二三――

きょうだい仲よく

(一) きいろいハットのたんぼさん

むらさきキヤツアのすみれさん

びろうど帽のげんげ坊

はるの野原の兄弟さん。

(二) ならんで風の父さんに

おかへりおかへりしてゐます

なかよく風の父さんに

おかへりおかへりしてゐます。

(本歌曲は『もし〜龜よ龜さんよ』か『僕は軍人大好きよ』その他簡易な歌曲を適當に附して下さい)

【第二話】

遠い國のむかしの話です。

五百軒位の小さな町がありました。此の町に住んでゐるみんなの人は、大變、あきつぼくて、誰か一

歌へないと見た時は一行一行、教へてゆく。
すぐ歌へた時は三回位くりかへして歌はせる
甲乙兩組にわかつて歌はせて見ることなども氣分をかへる上に必要である。
歌の説明をする時に、此の歌が持つ『兄弟仲よく』の精神を徹底的に知らせねばなりません。

『遠い國のむかしの話です』といふかわりに一寸おどけて。
『今日は「さうださうだの町」といふお話をします』とかへても面白いでせう。

人、何か言ひだすと、すぐ、

「さうだ、さうだ」と、いふこと、わるいことにかゝらば賛成をして仕終ひます。

中にも理髮屋のおぢさんは、一ばんあわてもので、何事でも町中の人のさきに立つてしなければ氣のおさまらぬ性の人でした。

理髮屋には、雨のふる暇な日だとか、嵐のこうくと音を立てる淋しい夜などは、町の人が澤山集つて、いろ／＼の話をするのでした。

理髮屋のおぢさんは、そんな時はいちばん得意な時です。チヨキチヨキと鋏をならし乍ら、折には、あやふく誰かの耳を切り落しさうにまでして、ナポレオンの強かつたことだとか、自分でも戦争になればナポレオンほどの働きの出来ることなどを話すのでした。

——ある晩でした。

昨日からの雨に氣をくさらせて、理髮屋に集つた人は、凡そ、三四十人もあつたでせう。

誰から言ふとなしに、職業のうちで、どんな仕事が一ばん立派な尊い仕事だらうか、といふ話になりました。

集つてゐた大勢の人は、始めの間は心の底で、みんな自分の仕事が一ばんよい立派な仕事だと考へてゐました。大工さんは大工さんで、俺が居なかつて見る。家が立たないだらう、さうすればみんな住むところがないのだ、だから一ばん立派な仕事だ、と思つてゐるし、農夫は農夫で、俺が麥をつくつて、パンのもとか出来るのだ、パンがなくて生きられるものか、だから俺の仕事が一ばん尊いのだとい

ふ風に。

ところが、理髮屋のおぢさんが言ひました「そりやあ何といつても一ばん尊いのは理髮屋さ。人間の身體のうちで何が一ばん大事だといへば頭だらう。頭なしのフラ／＼なんか、何にも出来やしない。その大事な大事な頭をきれいにする仕事だから、理髮屋は一ばんえらいのさ。靴屋なんかは足の方だから一ばんいけないね」と靴屋さんをさんざん悪口言ひました。

「さうだ、さうだ」

賛成しやすい町の人たちは、理髮屋のおぢさんの言葉に感心して仕終ひました。

あくる朝から、大工さんも、農夫も商人も、靴屋さんも、みんな、自分の仕事をやめました。そして、鋏とデヤツキを買つて来て、人の一ばん大事な頭を刈るといふ理髮屋さんになつて仕終ひました。

われも／＼と町中、みんな理髮屋になつて仕終つたので、どの理髮屋も、少しもはやりません、第一むかしから理髮屋をやつてゐたおぢさんが困つて仕終ひました。で、理髮屋をやめて、帽子屋になりました。

「おぢさん、なんで帽子屋になつたのだ？」

すると理髮屋のおぢさんは答へました。「頭の上につかゝるものは帽子さ。帽子屋が一ばん尊いのだよ」

「なるほど、さうだ、さうだ」

みんな感心して帽子屋が、ふえる、ふえる、みんな帽子屋になりました。で、一個も賣れませんが

今度は、もとの理髪屋のおぢさんは、煙筒屋さんにかわりました。

「どうしたのだおぢさん？」

「考へて見ろよ。帽子より高いのは煙筒ぢやないか。一ばん高いところで仕事をするのは、その人のねうちが一ばん高いからだよ」

「なるほど、さうだ、さうだ」

みんな煙筒屋さんになりました。

それから三日目です。もとの理髪屋のおぢさんは石炭屋になりました。

「えんとつより高く上るものは煙だ、煙のものは石炭だからね」

今度も町の人は「なるほど、さうだ、さうだ」と感心をして、みんなが石炭屋をはじめました。賣れません。

みんな困りました。

町中、ギラ／＼光るまつ黒な石炭屋さんばかりですから、砂糖屋もなければ米屋もありません。

みんなの髪は、獅子のやうにのびました。みんなの靴は、蓮根のやうに穴だらけです。お湯屋さんがありませんから、顔は、誰も、誰も、たぬきのやうに、くろぐろです。

全く、みんな困りました。

もとの床屋のおぢさんは、今度は、鑛夫になると言ひ始めました。石炭をふんで掘り出すのが鑛夫ですから。

まだ、こりこりし
ないのか、と思は
せるやうに、此所
で話さぬと、あと
の効果が上りませ
ぬ。

「さうだ、さうだ」で、みんなは、つるはしをさげた鑛夫。——鑛夫は、跣足で坑道へ這入つて行くわけにはゆきません。足のうらが痛くつて痛くつて仕様ないのです。

でも、一軒も靴屋がないのでせう。

さあ、いよ／＼困つたのです。そしてお仕終ひには、あれだけ悪く言つてゐた靴屋さんに俺はなる！

もとの理髪屋のおぢさんは言ひはじめました。

「靴がなくては鑛山へ這入れないからね」。しかも靴は石炭を踏むんだからね」

「さうだ、さうだ」

今度も町の人は、みんな賛成したかといふに、さうではありません。

「理髪屋のおぢさんの言ふことは、始めつから間違つてゐたのだ。それを本気で聞いて来た町のみんなも、いけなかつたのだ。職業は、どんな職業も、みんな尊くなくてはならないものなのだ」と、始めて

さつたのです。

そして、大工さんはもとの大工に、靴屋さんはもとの靴屋に、理髪屋さんのおぢさんも、もとの理髪屋に、みんなが、立ちかへつたのです。——それからは、どのお仕事をも尊み敬ひ合ひ乍ら、平和な生活をつづけたといふことです。

【質問】

(一) 職業に貴い賤しいといふことがあるでせうか。

(二) 此の邊で、何かの職業をいやしめるやうな例はないでせうか。それは、いゝ事だと思ひますか。

第一教課の通り、
児童に興味を持た
せるやうに質問を
發すること。

(若し正直に差別的な觀念からの例があげられたら、徹底的に教へ込まねばなりません)

【備考】

- (一) 唱歌を今度の集りにも持つて来るやうに注意をしておかねばなりません。
- (二) 第二話は、本教案より、もつと面白く表現してもかまひません。下品にならない程度で。それから、あまり最初に靴屋を悪く言ひすぎると、その兒童中に靴屋があると赤面させますから、程度に就ては充分考へねばなりません。

第三教課

【目的】

本教課は、人間の生命人格の絶対に尊嚴であることを教へるのが目的です。

【注意】

兒童と親しくすることはいいことです、否、親しくしなければなりません。たゞ、悪く馴れるといふ點だけは、注意しなければなりません。三回も會ふと、間違つた意味の馴れ馴れしさのために、教育の効果を失ふ場合があります。

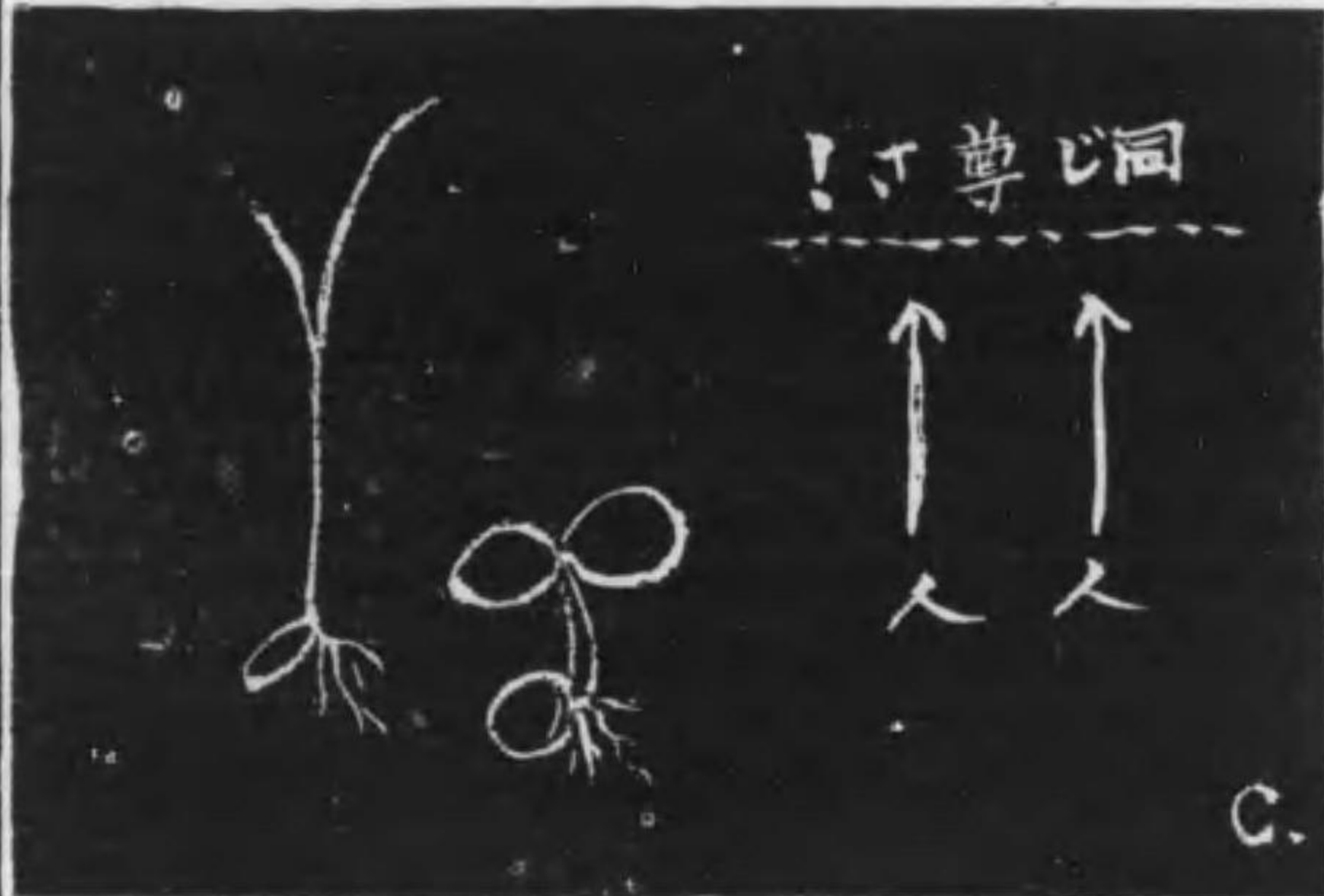
【第一話】

人間は、生れたところによつて尊い賤しいといふ區別のないこと、人間は、その職業によつて尊い賤しいといふ區別のないことを、前二回にお話しましたが、今日は、誰もみんな、此の上なく尊い生命の持ぬしであることを知つていただきます。

此の頃の田甫は、戦場のやうないそがしさです。お父さんも、兄さんも、お母さんも姉さんも、田植に一所懸命です。あの苗は、何から生え出て来たか——いふまでもなく叔からです。一粒一粒のあの粒には、芽ばえる生命があるのです。

畦に播く豆にも、みんな生命があるから芽生えて來ます。

挿畫C中の豆は、
發芽のあとに、種
子は残りませんけ
れど説明の便利上
下の如く書きまし
た。この事を一寸
児童に知らせる要
があります。



あの親を石でたたくいて芽生えさせない、あの豆を水に腐らせて芽生えさせないのは、まことにいけないことです。あの一粒の親が、一粒の豆が、大地に播かれたとき、何十何百といふ増えかたをする尊いはたらきをもつてゐるのです。

皆さんは恰度、此の一粒の親であり、一粒の豆の芽生えなのです。(C圖を描く)これから、段々大きくなつて、立派なはたらきをする力をもつてゐるのです。此の双葉の尊い生命を、大切にまもり、そだてないことは、大きな間違ひです。

私たち人間の生命——それは、人としての尊厳性であります。誰にも此の人間としての尊さがあります。人間は人間であつて、猿でも犬でもありません。随つて、どの人間にも、人間としての尊さがあるわけです。

であるにかゝはらず、中には、自分自身の尊さをわすれて暮してゐたり、他人の尊さをふみにじつて暮してゐる人があります。

人は
誰も

此の上なく

尊いのです。

(以上板書)

「人は、誰も、此の上なく尊いのです」よく、此の事を覚えて下さい。そしてみんな仲よく、尊敬しあつて、にこやかに生きませう。

【音楽】

さあ、一度、みんな立つて下さい。

此の前のお唱歌「兄弟仲よく」の印刷したのを出して下さい。

元氣に一度歌ひませう。(一回齊唱)

大體、上手に歌へるやうですね。今度は、それをふところにして、手をたたくやうに、もう一度、

前より元氣に歌ひませう。(全員拍手しながら歌ふ)

大變上手でした。

【感想發表】

さうして立つたまゝ聞いて下さい。これは、前に皆さんに書いていた第一回のお話の感想です。よく出来てゐたのを二つよみます。(見劣りのする方からよむ)

もう一つの方はこれです。(よい方をよむ)

どちらもよく出来てゐますね。

人は生れたところによつて、尊いとか、賤しいとかいふ區別のないことが、はつきりわかりましたね

感想は豫め選んで
おいて、集つたも
のみんなと共に持
つてゐること。
二枚だけ持つて出
ては、讀んでもら
はない児童が失望
します。

第一課の、お話は少し感傷的であり第二課は面白く出来てゐる關係から第三課は方面をかへて、史實を童話化したのです。

さあ、静かに座つて下さい。深呼吸を五回くりかへしませう。

【第二話】

むかし、梅尾といふところに、明恵上人といふ徳の高いお坊さんがゐりました。

自分は佛の弟子である。佛の弟子である以上、どうしても佛の精神を自分の身籠姿にあらはさねばならないと、深く考へてみました。

ある日のこと、小僧さんを連れて田舎道を歩いて居りました。

梅尾のお上人が通られる、といふので田植にいそがしいおばさんたちもおぢさんたちも、ていねいに禮をします。明恵上人は、一々、にこやかに挨拶をしながら、とあるせまい路にさしかゝりました。

人はみんな、いそがしく働いてゐます。みなさんのやうな年頃の子でも、苗をになつたり、投げたりしてゐます。

それに一匹の犬の仔が、路のまんなかでぐうぐうねむつてゐるのです。のんきですね。

明恵上人は、にっこりと笑ひました。「可愛らしい顔をして、よくねむつてゐることだ。はゝゝ。お前はいそがしいことを知らないのだな」

そしてひよいと、犬をまたげ越えて十町ばかり歩きました。

すると上人は、急に「あッ！ 仕終つた！」と大きな聲をあげて、一さんに來たみちを走りかへるのでした。

小僧さんは吃驚しました。仕方がありませんから、上人のあとを走りついてゆきます。

田甫の人たちは何事が起つたのかと、驚いてゐます。

六月のカンカンとてりつける暑い陽が、つる／＼光つた上人のあたまにピカリ、あとからついてゆく小僧さんの小さなあたまにピカリ、そして汗は瀧のやうに流れます。

「お師匠さま、どうしてそんなにいそいで走つてかへるのですか」

小僧さんは、フーフー言ひ乍ら、たづねました。上人は、

「大變だ、大變だ！」

と、たゞ、そればかり言つて、まだ走ります。五丁、十丁……。仔犬の寝てゐるところまで走りつくと、上人は、土の上につたりと座つて両手を合せました。そして仔犬に向つて、一生懸命に、お經をよんでゐるではありませんか。

小僧さんは、あまりのことに、上人はきつと、氣が狂つたのだと思ひました。佛さまの前ではいつでもお經をよんでゐますけれど、仔犬の前では今が始めてですから。

近くの田甫に働いてゐた農夫たちも、全くさう思ひました。「あゝあのお徳のすぐれたお上人様も、とら／＼氣が狂つた」と。

が、決して、さうではないのです。

上人は、一切衆生悉有佛性といふ、お釋迦さまのお言葉を思ひ出したのでした。生きとし生けるすべてのものには、佛さまになる尊さがあるのだ。それに、私は今、來る路で、仔犬をまたげ越えて來た、全く、魂の尊さをわすれた、大きなあやまちをして來た、一刻も早く、お詫びしなければならぬ！

動物愛護のこころ
を起させるやうな
ことも必要とす。

といふのが上人の心持ちでした。

——あとで小僧さんをはじめ、田甫の農夫たちは此のことを聞いて、自分の平生の、生命の尊さを忘れた生活を、大變に恥ぢ入つたといふことであります。

【設問】

- (一) 明恵上人が仔犬を拜まれたのは、どういふわけでしょう。
- (二) 人はみんな同じやうに尊いわけを話せる人は手をあげて下さい。
- (三) 仔犬をいぢめるやうな兒は、人の尊さを知つてゐるよい兒でせうか。

【體操】

さあ、元氣に體操をして、今日は歸りませう。

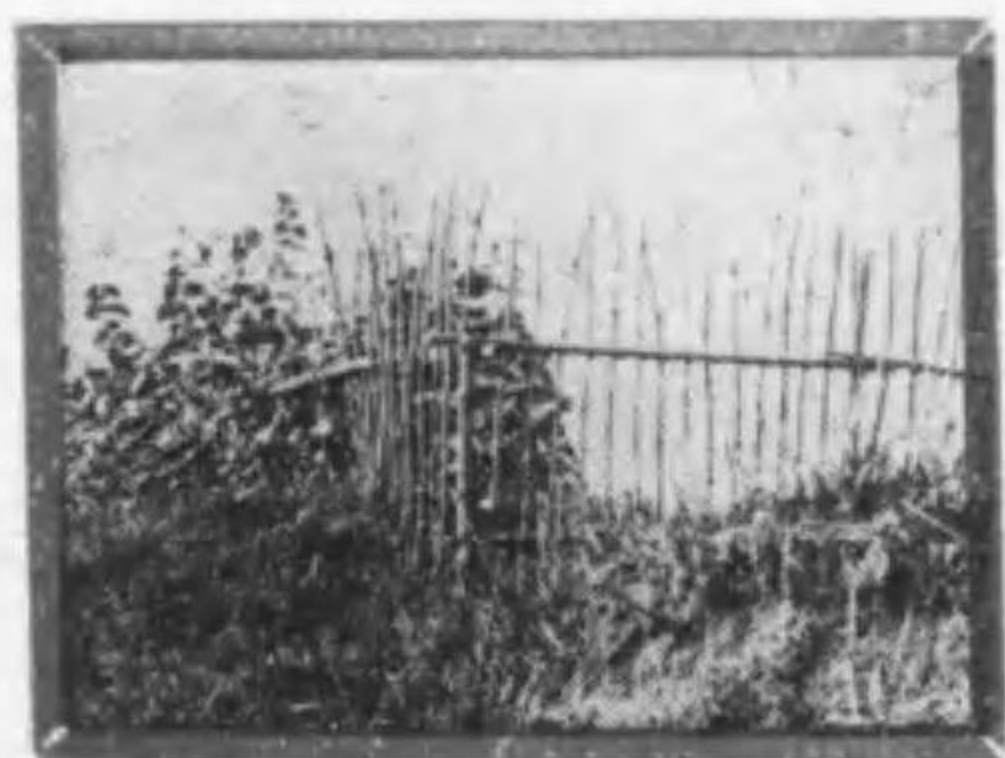
體操(1)體操(3)を行ふ

では、さようなら。——今度の集りには、とても面白い遊戯をしますから、楽しんで来て下さい。人も缺席しないやうに来て下さい。いゝですか。約束しましたよ！

【備考】

- (一) 人間の尊さに就ては、上級生に對しては、もつと深く、例へば生命の唯一尊嚴、身體の唯一尊嚴といふ點まで話して下さい。
- (二) 仔犬の切紙などをつくらせて、印象を深めてゆくことも方法です。

【揭示】



みんな尊い人間だといふことが

はつきりわかりました。

へだての垣をとりのぞきませう。

仲よく手をつなぐ

うれしい世界をつくりませう。

みんな尊い人間だといふことが

はつきりわかりました。

揭示には出来るだけ大きい方がいゝ

児童の一ばん目につきやすいところに、左のやうな、きれいな繪をかゝけておきますと、自然に何かを教へられます。誰一人も集まらない前から、ちゃんと貼つておくのです。

第四教課

【目的】

本教課は、人はみんな兄弟として生きねばならぬことを教へるのが目的です。

【注意】

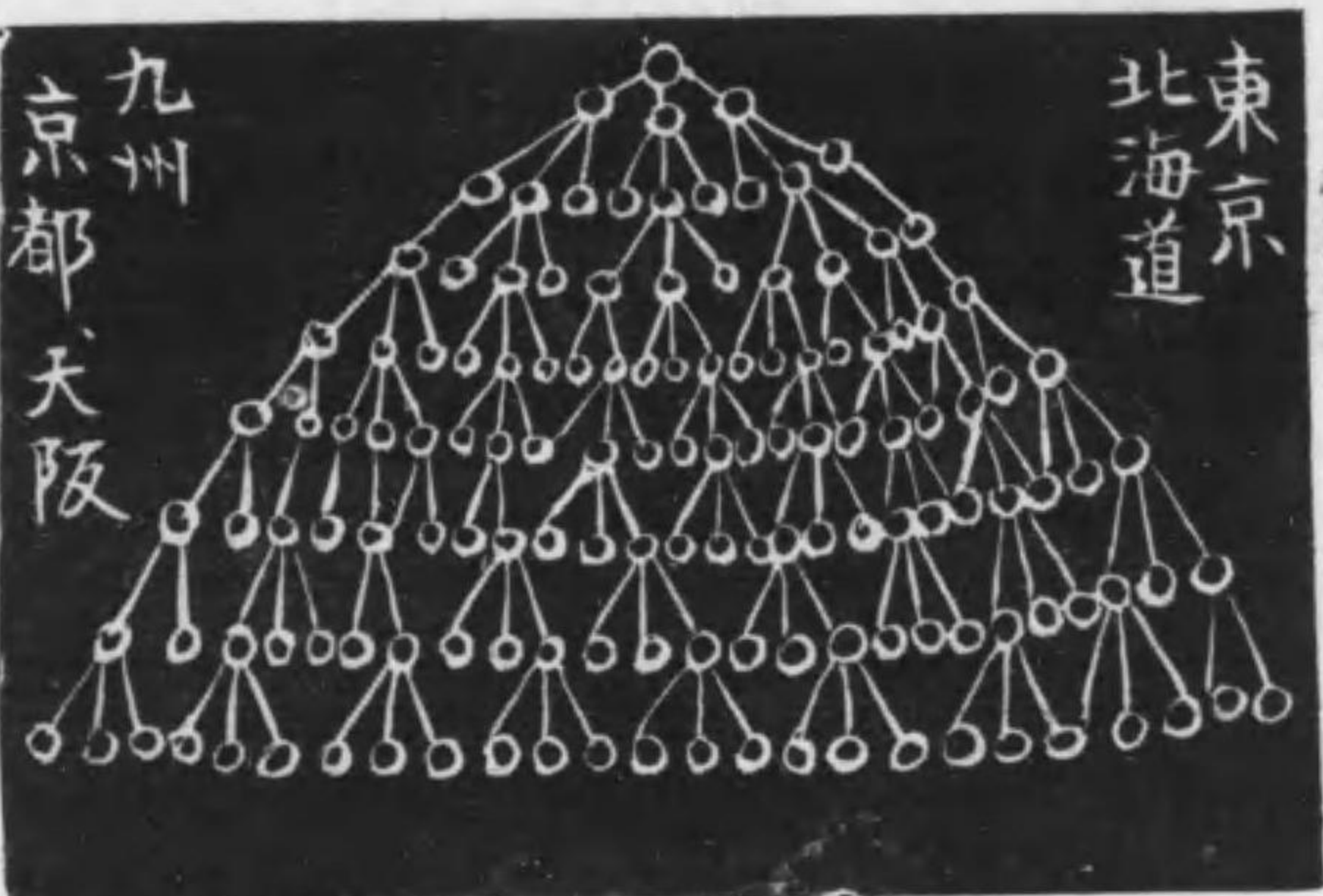
暑い時ですから、會場を出来るだけ、涼しいやうに設備をしなければなりません。白い花一輪を投げ入れるだけでも、すがすがしいものです。

【第一話】

今、田植をしたと思つてゐたのに、もう、田草とりが殆どすんで仕終つて、田甫は青々としてゐます。こゝろみに、あの一株の稻を御覽なさい。三四本であつたものが、八本にも十本にもふえてゐます。そしてやがて秋が来れば一粒が百倍にもなるのです。

わが國の人口でも、さういふ風に、どん／＼と増えてゆきます。たとへば、ここに一人のお母さんがある。(D圖の一ばん上の○を一つ描く)此のお母さんが三人の子供を生む。(次の三つの○を描く)この三人が、また三人づつのお母さんになる。此の赤ちやんが大きくなつて、お母さんになつて、おぎあ／＼と赤さんが生れて来る。また、生れて来る。まに生れて来る。いくらでも生れて来る。かうして、何十代何百代か経つと恐ろしい數の人になるのです。

日本の人口の増加率などを國勢調査の表などによつて示すことも、いゝ方法です。



始めの間は、血をわけた兄弟、從兄弟として親しくしてゐますが、五代もたち七代もたちますと、まるで他人になつて仕舞ふのです。そして、東京に住む人も出来れば、京都に住む人も出来る。四國、九州、北海道とそれ／＼遠いところに住むやうになるのです。が、もともとみんな兄弟なのです。一人のお母さんから生れた兄弟なのです。此の兄弟同志が、わけへだてをしたり、わけへだてをされたりすることは、とてもいけないことなのです。

九千萬同胞といふのは、かういふわけだからです。さあ、一度立つて下さい。前から四列まで、廻れ右。そして三步うしろへ。後から三列まで、そのまま、三步うしろへ。まんなかの四列のうち、前の二列は左側へ、後の二列は右側へ。

さあ、これでまんなか、あきましたね。一人づゝ手をつなぎ合はせて圓形をつくつて下さい。さうして、手をつないだまゝ、靜かに座る。

私は、みなさんのまん中へ入れて、戴きます。

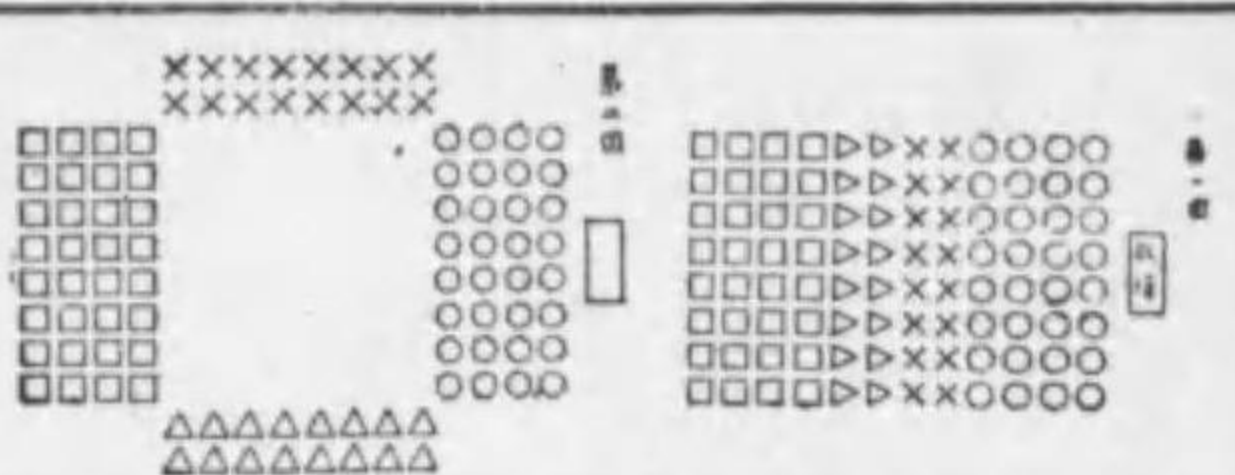
かうして見ると、自分の手をつなぎあつてゐるのは右の方の手に一人、左の方の手に一人、合計二人だけですが、その右の方の手の人、その左の手の人を通じて、集つたみんなが手をつなぎ合つてゐることになりますね。世の中の人々は、すっかり兄弟だといふのは、かういふわけによるのです。よくわかつたでせう。さあ、つないだ手をそのまゝ、一しよに上げて下さい。一一、三四、一二、三四。……今度は號令のかわりに「九千萬は、みな兄弟、九千萬は、みな兄弟」と言ひ乍ら手をふつて下さい。

【室内遊戯】

此の前にお約束した遊戯を始めませう。〇〇さん(中心に座つてゐる児童を指して)から左へ番號を！ 恰度半分のところで、少しあけて下さい。右側が赤組、左側が白組、赤組の指令官は××さん。白組の指令官は〇〇さん。此の兩軍は嘯であり、盲であります。随つて言ふことも見ることも出来ません。戦ひの方法はかうです。

うしろで手をつなぐ。指令官から、石か、鉄か、風呂敷を味方に傳へる。味方は順次、これを最後まで傳へる。みんなに傳つた時、總員がチャンケンをする。誰かゞ間違ひを起すと、味方が變つたものを出すから、そんな亂れたことでは、とても勝てない。——誰の使命もみんな尊い。誰の責任もみんな重大です。

さあ、一人も間違はない様に。指令官から命令を送つて下さい。……最後まで來ましたね。さあ、用意！ みんな手を出して下さい。一、二、三！ 白組が勝ちました。もう一度。(三四回くりかへす)



指令官は、一ばん先頭の人にすべきです。豫め用意をしておいた紅白のたすきを指令官にわたすことによつて紅軍白軍の觀念を強くすることも方法です。

(終つて唱歌を一回歌ふ。深呼吸五回)

【第二話】

さびしい山の中の切開かれた小さな畑の隅に、丸木を組合せた粗末な藁小屋が建つてゐます。嘉助爺さんの家です。爺さんは今年、六十五です。まだ丈夫さうな身体をしてゐますけれど、何となく悲しさうな目色を持つた爺さんです。

殊に夕ぐれは、悲しさうな顔をします。大きな星が、赤く光つてゐるのを、ふと見出した時など、爺さんはぼろりぼろりと涙を流します。

爺さんの一人娘が、此の世の訣れに最後の眸を、力強く見張つた時、窓の向ふの山の上に、赤い大きな星が、泣いてゐるやうに光つてゐました。

爺さんは、之れを思ひ出すのです。

……ある日、燃えるやうなお陽さまの真下で、お爺さんは一生懸命働いて居りました。

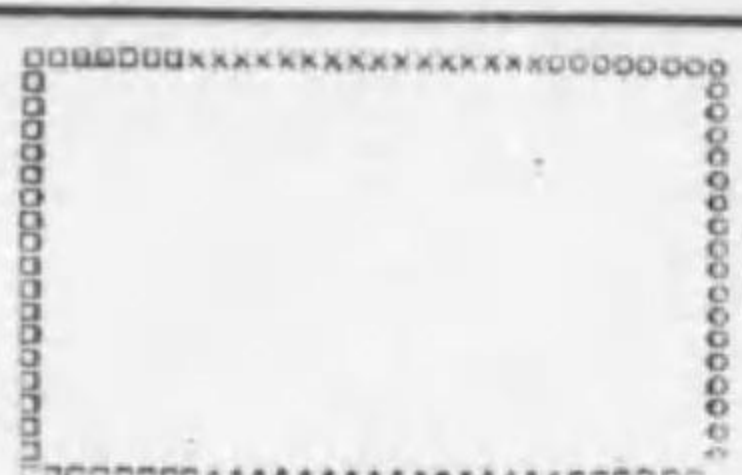
「——私は長い間、町で働いてゐたのですが、不景氣のために失業しまして、やむを得ず、此の山を越えて故郷へかへらうとしてゐるところです。何か餘つたものでもありましたら恵んで下さい。」

其所へ、さう言つて立つた労働者がありました。

生憎、その日は、お爺さんの鍋には一つぶの御飯だつて残つてゐませんでした。」

「……あゝ、さうですか。それではどうも仕様がありません。御いそがしい中を大變御邪魔しました」労働者は、去りました。

第三圖



爺さんは、その後姿を眺めて、大層氣の毒に思ひました。呼びかへして少時、待つて貰つて、何か炊いてあげやうと思ひました。が、足もとの南瓜を見ると、きつい太陽のために、しほれてよれ／＼にならうとしてゐます。

爺さんは、急いで水をあびせてやらなければ、枯れて仕終ふことをよく知つてゐますので、「まあ、いゝよその人のために、うちの大事な南瓜の實入が少ないやうではつまらない」と、獨言ち乍ら、せつせと働きました。

赤い大きな星が、山の上に光り始めると、お爺さんは涙ぐみつゝ、いつものやうに、家にかへり、夕飯の仕度をするのでした。

ところが、その晩は、どうしたのか、くすくすと、くすぶるばかりで、火は薪につきまません。どんなに上手に焚きつけて見ても、どうしても燃え上りません。

「此處管はないんだが……」

爺さんは、煙で眞赤にした目をしばたゝかせ乍ら、大きなため息をつきました。その時です。

爺さんは吃驚しました。お父さん！ といふ死んだ娘の聲が聞えたのですから。

併し、爺さんは、すぐ、それは何かの聞き間違ひであらうと、聞耳をたてることをやめて、再び、焚きつけにかゝりました。

すると、また「お父さん！」と、はつきり聲が聞えます。今度こそは、爺さんも、自分の耳を疑ふわ

けにはゆきませんでした。で、急いで戸口に出て見ました。

そして、其所で、二度吃驚しました。

可愛い、娘の顔が、夕闇の中に浮んでゐることだらうと、心を躍らせて飛び出したのに、白い一羽の名も知らない鳥が、赤いくちばしのついた小さな首を思案げに、かしげて栗の木にとまつてゐたのです。そして、お爺さんの顔を見ると、三度、

「お父さん！」と、淋しく言ひました。

「おゝ、娘よ、お菊よ、お前は鳥に生れかわつたのか？」

爺さんは、抱きつかうとしました。鳥は驚いて、バタ／＼と飛びました。そしてもう再び、屋根の上にも栗の木にも歸つて来ませんでした。

爺さんは、しばらく木人形のやうに、突立つてゐました。

「あゝ、おかしなことだ。娘が、お菊が鳥に生れ變つて、わしに會ひに来た。『お父さん』とも何とも言はずに、栗の木にとまつてゐたら、わしは鐵砲で殺したかも知れない。あゝ、鳥だからといふて、無暗に殺すわけにはゆかぬ。……それにしても、あゝ、もう一度、あの娘の鳥に會ひたいものだ……」

そんなことを思ひながら、焚きつけることに力を入れましたが、矢張、不思議に燃えつきません。

「どうしたものか知ら？」

爺さんは考へました。すると、ふと、晝、たづねて来た労働者の顔が浮んで来ました。

「あの人は、どこか死んだお父さんに似てゐた。さうだ、口のあたりがたしかに似てゐた……」。ひ

迷信に陥らないやうに注意する必要があります。

よつとすると、お父さんの生れ變りかも知れない。それで——お父さんに御飯をたべさせないやうなのは自分も食つてはならないといふので、火が燃えつかないのかも知れない……」

さう思ふと、爺さんは、今まで、他人だから、鳥だから、虫だからといつて、大切にしなかつたことの數々が心に浮んで来て、すまなくてすまなくて仕様がなかったのでした。

「あゝ、わしは、これから、誰とでも親しくしなければならぬ。遠い昔に、親兄弟だつたのかも知れないから……」

爺さんに、そんな尊い心がけを教へたのは、山の向ふの海邊の大きな別荘をぬけ出した鸚鵡だつたのでした。

【設問】

- (一) 人は、みんな兄弟であるわけを言つて下さい。
- (二) 嘉助爺さんは、何んで他人にでも不親切であつてはならないと感じたのでせうか。

【宿題】

歌、俳句、短詩で何か『みんな兄弟だ』といふことをあらはしたものを作つて来て下さい。

【備考】

宿題に對して、何かあらかじめ手本をしめして置くことも無駄ではありません。

第五教課

【目的】

本教課は、人と人との社會的關係を教へるのが目的です。

【注意】

兒童の生活は極めて利己的ですから、本教課の如きは相當の努力を拂はねばならないことです。前回の宿題を集めることを忘れてはなりません。

【第一話】

今日、此所へ来る迄で、みなさんと同じやうな年頃の二人の子供が、眞赤な顔をして口論をしてゐました。ふと私の耳へ

「お前には何にも關係がない、ほつて置いて呉れ！」

といふ言葉が這入つたのです。

「お前には何にも關係がない」

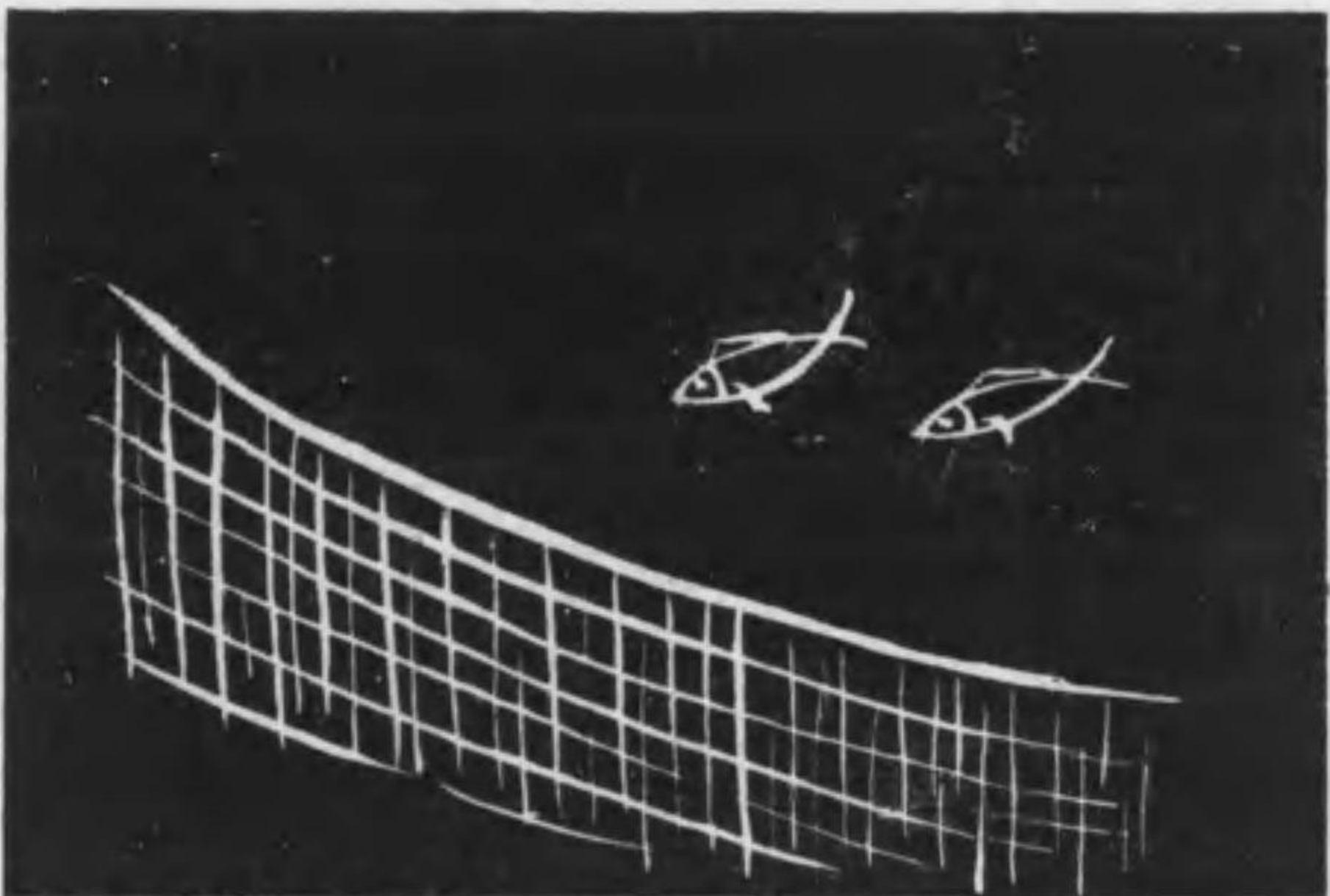
世の中に、そんなことがあるでせうか。一寸見ると何の關係もないやうな人ばかりです。しかし、よく考へて見ると、世の中の總ての人は、みんな深い關係を持つてゐるのです。

みなさんの着てゐる着物は、誰がつくつて呉れたのですか。お母さん、さうです。お母さんが縫つて

社会的な関係についてにはなるべく詳細に話す方が効果的です。

下さつたのですが、その糸は？ その針は？

(挿絵E)



そして、その布は？ 信州あたりの工場で、汗にまみれた女工さんの働きによつて織られたものです。その原料は印度から——さうすると印度の綿をつくる人々との関係があるわけです。それを船につんで運んで来たのですが、船をつくつた人、船を動かせる人、船を動かせる石炭を掘る人、といふ風に考へて御覽なさい。一枚の着物を着てゐるといふ事だけの事にさへ、数限りない人々との関係が生まれて来るのです。

社会は恰度、網の目のやうなものです。

その一つ一つのむすび目が互にながらあつて、魚をとらへる網が出来てゐるやうに、一人一人の人と人とが互に扶け合つて、よい社会がつくりあげられて行くのです。

網のむすび目が一つほぐれ切れても魚は逃げて仕舞ひます。一人の人を兄弟でないやうに疎んずることによつて社会は、よい社会とはいへなくなるのであります。

人は
みんな

「扶け」といふ文字には假名をつけること。

適当な場所——涼しい蔭で、なるべく平たい、腰のかけられるところを豫め選んで置かねばなりません。

本歌曲は野村成仁氏の作。

つながりあつて

生きてゐるものです

扶け合つて

よい世界をつくりませう。

さあ、これをノートにうつして置いて下さい。(以上板書)

【林間教授】

さあ、今日は、外へ出て見ませう。二列にならんで下さい。私について来る。(適當なところまで導く) 手をつないで、圓くなつて下さい。

第一に、お唱歌をならひます。(唱歌の謄寫したものを配布する)

『みんな』の歌

(1) みんなでつなご 手をつなご

なかよくつなご 手をつなご

一人はなせば みなだめだ

しつかりつなご 手をつなご。

(3) みんなではしれ みなはしれ

なかよくはしれ みなはしれ

ひとりこけると みなだめだ

しつかりはしれ みなはしれ

(2) みんなでうたへ 歌うたへ

なかよくうたへ 歌うたへ

ひとりちがへば みなだめだ

しつかりうたへ みなうたへ。

お寺のかねをついて、みんな堤がこわれないやうに、懸命に働くのでした。このさわぎの中にも金持ちは、うそぶいてゐました。

「わしの家はこんなに高い丘の上にある。とても水などついて来やう筈がない」
全く、ものも言へないやうな態度をとるのでした。

——村人の生命がけの働きも、怖い水の力にはかなひませんでした。堤は終に切れて、田甫へ、村へ——水は瀧のやうに流れ込みます。

みんなは生命からん／＼小高い丘にまで逃げました。
雨はまだふりやみません。

せめて、金持ちの家の納屋にでも想させてもらひたい、と誰も思ふのでしたが、此所の家では、「開りがない」といつて、固く門をとざして仕終つてゐるのでした。

やがて、水は遠くさつて、からりと晴れ渡りました。が、洪水の引いたあとのあはれた状は——田甫は河原になつてゐます。家は一軒だつて残つてゐません。

みんな途方に暮れて仕舞つたのです。

いやだけれども、かうなつては、あの村一ばんの金持に頼んで、少時の暮しを扶けて貰ふのより外ない、と考へました。そして、代表を選んで、このことを申込みました。

「関係がない！」

その一言で、金持ちは、あつさり斷つて仕舞つたのでした。

仕方がありません。

いろ／＼相談した上、全村あげて、北海道へ行くことになりました。いゝあんばいに家族移住を道廳の方では奨めてゐましたので。

あとに残つたのは金持ちの家一軒です。

第一、電燈會社が、たつた一軒だけでは損だといふので電力を送ることをはりました。新聞屋さんが遠いから毎日は配達出来ませんと言ひ出しました。魚を賣りには来て呉れません。茄子や胡瓜を賣りに来る農夫は一人もゐないのです。

一寸買物に出ると、一日位、つぶれて仕舞ひます。郵便さへ、三日に一度位より配達されないではありませんか。

河原には、青草がはえ繁つて、きつねのなき聲さへするやうになりました。

「此處にさびしくなると、泥棒が来るにきまつてゐる！」

金持ちは、夜さへ、ろくろくねむられなくなつて仕舞ひました。ねづみの音にも、泥棒ではないかと起き上るのでした。

そんなことを毎日、つゞけてゐるうちに、とう／＼病氣になりました。が、また、お醫者さまが、滅多には来て呉れません。

——こんなになつて、始めて、世の中の總ての人は、關係がないとは思へない、ことを深く、此の金持ちが知つたといふことです。

併し、もう仕方がありません。村の人々は北海道で成功して、再び村へなど歸らうと言ひ出すものが一人もなかつたのですから。

【設問】

- (一) 自分一人で生きられないわけを話して下さい。
- (二) 金持ちは、おしまひに、どうなりましたか。

【体操】

体操(1)(3)をかるく行つて解散。

【備考】

林間教授といふものゝ効果の多い理由は、環境の變化から来る注意力の集中といふこところにあります。もし附近に史蹟などあれば、この歴史を通じて、教育してゆく方法もいゝことです。

第六教課

【目的】

本教課は、差別するものゝ人格欠陥を教へるのが目的です。

【注意】

- (一) 第一部としての教課はこれで終りをつけるので適當な結論を與へねばなりません。
- (二) 第一部の連續講座によつて、新に組織を持つとすれば、此の教課の時に、充分その準備を整へねばなりません。
- (三) 組織ある兒童に對しても第一教課より第六教課までを一通、教へることは無駄でありませぬ。

【音楽】

『みんな』の歌を練習して、なごやかな氣分を充分に起させる。

【第一話】

人は生れたところによつて、尊い賤しいといふ區別はない。人は職業しごくによつて、尊い賤しいといふ區別はない。誰も尊いのだ。みんなは兄弟だ、だから扶け合はねばならない——三月から此の月までかゝつて、これだけのことを御話しました。

唱歌の練習は、立つて行ふ方がいゝのです。

みなさんは、此のことを充分知つて下さつたことと思ひます。

(挿絵F)



月々に月見る月は多けれど、月見る月は此の月の月、と歌はれたあの仲秋の名月のやうに、まるく、

上級生などには、「汝に出でたるものは汝にかへる」「播いたたねは刈らねばならぬ」などを引用して、その理解を深めると。

もし、此の正しいことを行はないひとがありましたら、それこそ、困つたひとであります。

もし、此の正しいことに逆つて、他人を差別するやうな人がありましたなら、その人の心は、まことに氣の毒な心であるといはねばなりません。

同じやうに仲よくしなければならぬのに、相手が親しい心でむかつてゐるのに、自分の方から相手を蔑むのは、自分のおろかさ、自分の間違ひを自分で證してゐるといふことになるのです。わけへだてをする理由のないものをわけへだてするのですから、そのわけへだてをする方が大きな間違ひだ、といふのです。天にむかつて唾するものは、その唾を自分の顔にうけねばならないやうなものです。

もし、こんな間違ひをする人があつたなら、私たちは、親切に教へてやらねばなりません。そして、いつも心あかるく、暮しませう。

冴えた、清らかなこゝろとこゝろのうつくしい交りを私たちの社會を清め高めてゆくのです。

自分の尊いごとく、他人も尊いのです。みんな、その尊さを禮讃しあはねばならぬことです。そしてそれが、たゞ心の中だけではなしに、姿、身体にあらはして實行するところまでゆかねばなりません。

【體操】

体操(1)(2)を行つたあと、新しく次の体操を教へる。

これは極めて元氣に行はねばならぬ。

(4) 操 体



深呼吸を靜かに五回。

【宿題發表】

前回取集めた詩、歌、俳句などのいゝものを四五、黑板に書いて、説明する。

【休 憩】

特に十分ばかり休憩時間をつくつて、児童相互間の會話中に、何か問題に觸れ、問題を暗示する内容の談話がないかを聴取する。

體操(4)はヨイサヨイサといふかけ聲で行ふ。
なるべく違つた内容の詩、歌などを選ぶこと。

座談會は四座をつくること。

【座談會】

長い間、いろいろお話して来ました。今日は皆さんから、何でもいゝから、感じたことを話していききたいと思ひます。

さあ、誰からでもいゝのです。始めて下さい。

(容易に發言のない時は、童話のうちで、どれが一ばん面白かつたか、とか、どういふ話を聞いた時に一ばん感じたか、とかの質問から誘ひ出してゆかねばなりません。また、休憩時間中に何か聞いてゐたら、之れを、それとなしに巧みに打出して、話してゆくことも一つの方法です)

(いろいろの話が出たならば、最後にその縮くりをしなければなりません)

(話が思はしく出ないやうであつたら、こちらから、全体を綜合した話をなし、六ヶ月間に話して来た効果を深めるやうにしたいものです)

大体、お話もすみましたから、今からお茶の會をします。お茶とお菓子をいたゞいて面白く遊びませう。

(茶、菓子を配布する)

みんな一しよに「いたゞきます」と御挨拶をさせよう。

蓄音機を聞きませう。(童話、唱歌など児童のよく知つてゐるのを二枚ほどかける。あまり多くなると倦怠します)

誰か口笛を上手に吹く人はありませんか。唱歌を歌つてもいゝのですが……。(にぎやかな、それ

經費の關係で茶菓は出さなくともいゝのですが、あつた方が印象をふかめます。菓子は少量でよろしい。

で統制のある團樂の氣分にまで導く)

【高唱】

では、今日のおつまりは、これでお仕舞ひにします。一度立つて下さい。

みんな少しづつ、間をあけて!

用意で、拳をにぎつて、肩を張る。

そして、「和、和、和——ア」と三度「和」をとなへる。始めと、二回目とは手を内側へ、第三回目は大きく上にひらく。

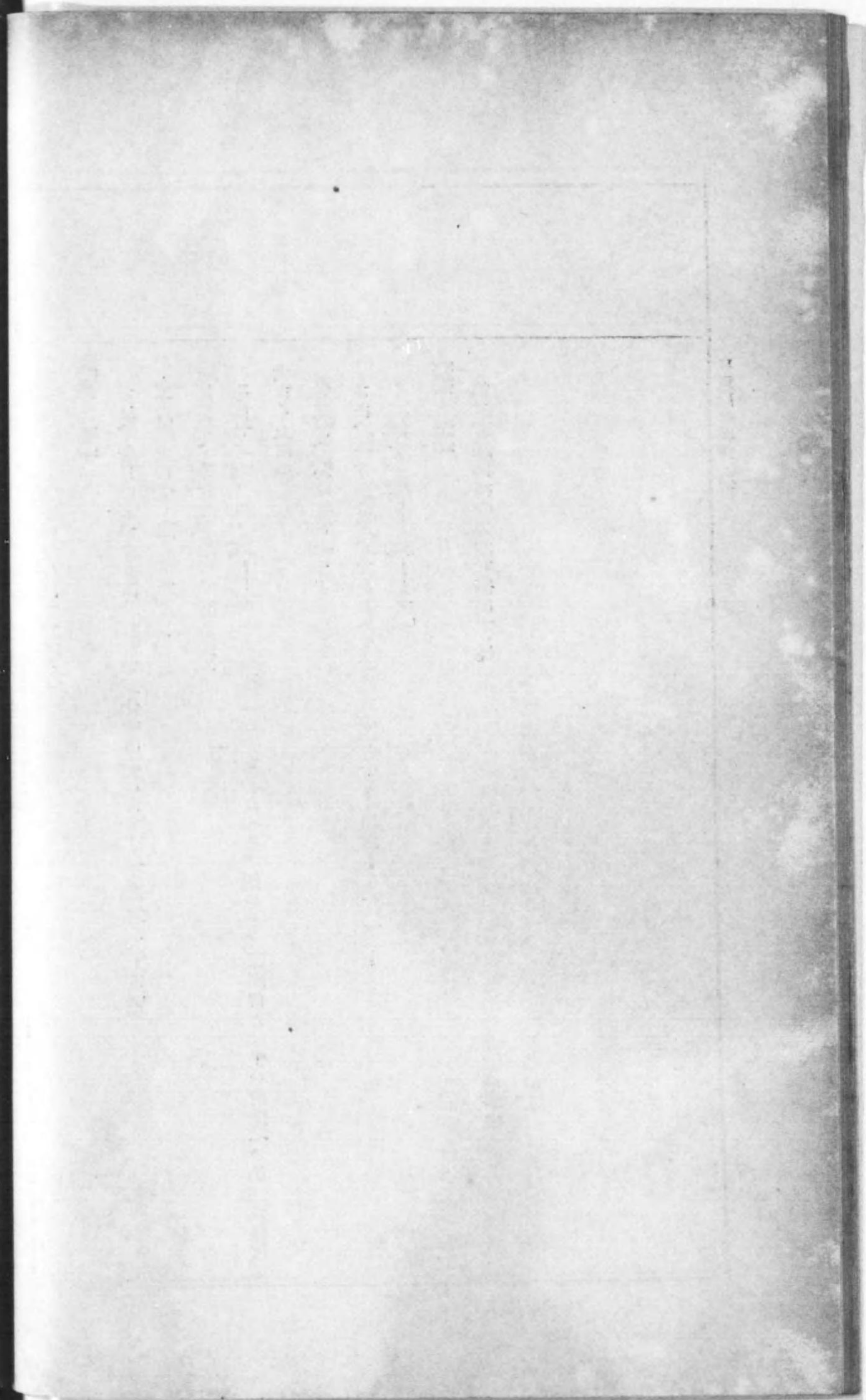
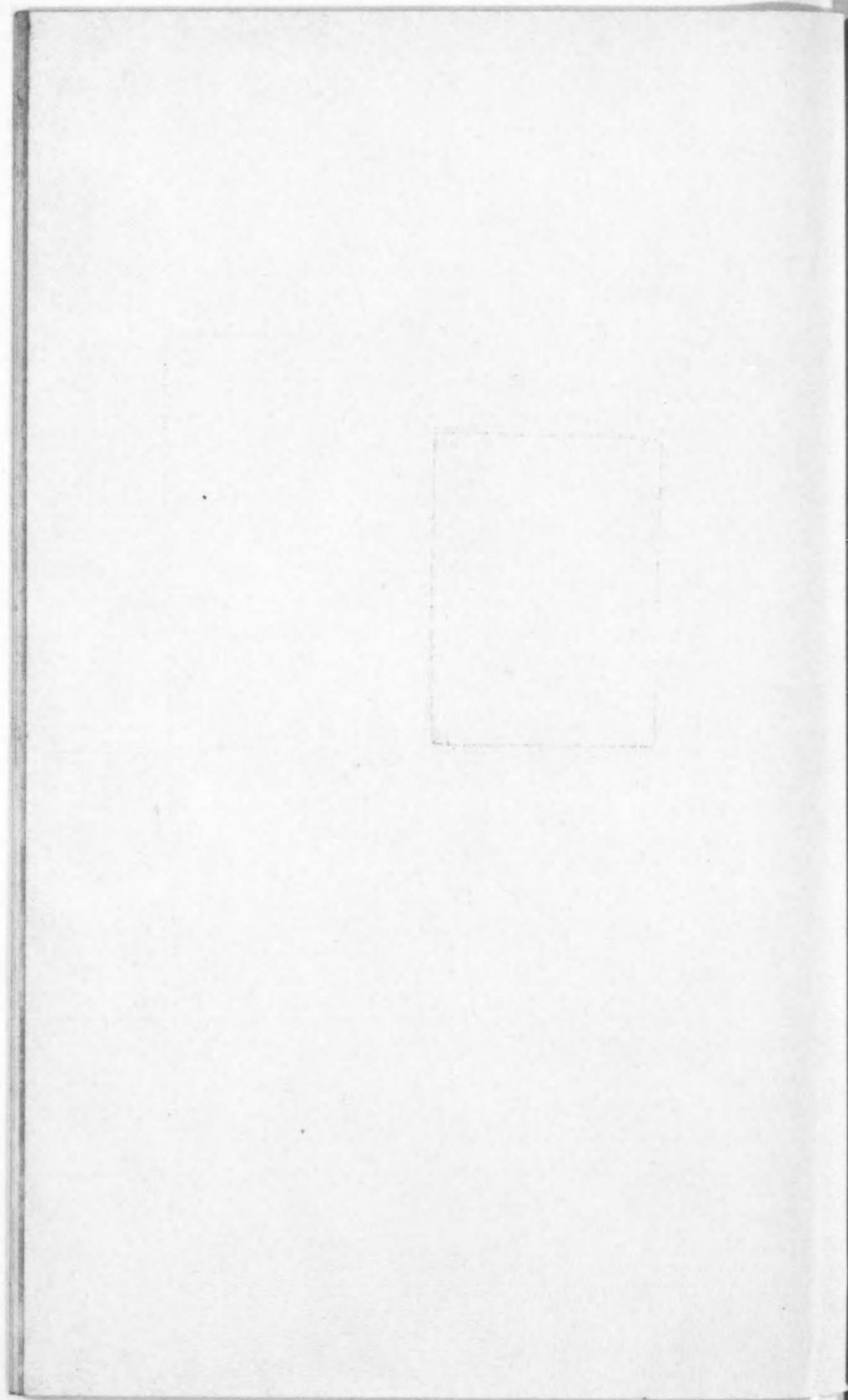
元氣な、かけ聲でせう。

さあ、一生懸命に、力をこめて大きな聲で。——用意! 一二三!

「和——和——和——ア」

【揭示】

第三教課同様の方法で描出する。



第二部

第一教課

【目的】

本教課は、自覺の重要性を教へるのが目的です。

【注意】

第二部は、特に内部兒童の訓練を中心に考へしかも常時的な組織によつて行ふものでありますから、もし、これを一般的即ち所謂融和的使用の場合は、或程度までの取捨が必要となります。指導者も、融和團體の職員だとか、小學校の教職員ではなくて、青年融和運動團體の闘士たち——即ち、その町、その村などの青年融和團體の幹部など——であることを原則としてゐますから、自然、教課訓練の内容が、第一部とは變つて來ます。

【點呼】

さあ、みんな車座にすわらう。
心をおちつけるために、静かな深呼吸を五回——。
缺席した人はいかね。

第一班——全部出席。

融和事業研究第十六輯、第十七輯の「兒童融和教育の研究」を御参照ひます。

出席簿を作成して置く必要があります。



まつ白な美しいばら
けがれの無い、まつ白なばら
人は誰も
このばらのやうに
美しく尊いのです。

班の組織については上掲「兒童融和教育の研究」中に詳説してあります

朗唱は、あらかじめ謄寫、又は印刷して配布すること

第二班——全員出席。

第三班は？ ××君一人缺席。

第四班も全員出席。

第五班は？ 班長がゐない？ 班長は病氣だつていふのだね。その他は全部出席だね。

今度から、出席の點呼は、班長が自分の班をしらべて報告することにきめよう。それの方が早くていゝから。

各班长！ わかつたね。

第五班の班長には第五班の君から此のことをよく言つておいて呉れ給へ。

【朗唱】

獨唱

われらは鍛えむ。

全唱

此の身體、此の精神

此の團結を、鐵の如くに。

獨唱

われらは勉めむ。

全唱

此のわが身、此のわが世に

正義の光り、滿つるまで。

獨唱

われらは備へむ。

全唱

來るべき、使命のために

新しき世の、あけぼのに。

朗唱は獨唱の部分を指導者が読み、全唱の分を全團員が讀む、低音で、稍ゆるやかに調子をあはせねばなりません。

【音樂】

『團』の歌を練習しやう。さあ、立つて——。

始め音階の練習。

もつと大きな、強い強い聲。——腹底から出た聲で練習するのだ。

今度は、曲の練習。

園の歌

And. $\text{♩} = 108$

ちよりをわがまはらるのいのち
 こっぴりかたきわらるのまが
 んんろふろけはふよるのまが
 んんろふろけはふよるのまが

『園』の歌

- (1) 陽よりもわかき
われらのいのち
鉄よりかたき
われらの結び。
- よき日のため
よき日のため
鍛へよつねに
よき日のために。
- (2) めざめのちから
此の身をまもり
へたての扉
此のときひらく。
- よき日のため
よき日のため
つとめよつねに
よき日のために。

(3) おさなき身にも

使命はおもし

行く手の責は

われ等にかゝる。

よき日のため

よき日のため

そなへよつねに

よき日のために。

【第一話】

ダイヤモンドは高價なものだ、といふことを知らない間は、南アフリカの土人たちは、これを足蹴にしてゐた。

知る、といふ事は大切なことだ。

……併し、たゞ知つた、といふだけで、深く心に、目醒めるところがなければ何にもならない。

目醒める——自覚する——

一體、それはどんなものであるか。

第一に自分を知らなければならぬ。自分とはどんなものか？ といふことを——。

第一話、第二話共に、紙数を制限するために、極めて簡潔に記述したにすぎませぬから、指導者は、これに肉をつけ衣をつけて話して頂かれればなりませぬ。

地方の事情、兒童の差別事實の認識の程度によつて、内容改更を必要とします。



鏡にうつして、目は此處格構をしてゐる。鼻は此處形をしてゐる、姿はかうだ、といふ自分。それも自分ではある。

けさ泣いた、ひる笑つた、ばんは怒つた、といふ自分。それも自分である。

その身體と、その精神とを全體にした自分——人間としての資格——に目ざめることが何より大切である。

ある。

どの町、どの村に住んでゐるやうが、どんなに貧しからうが、我々は、みんな人間であつて、犬でもなければ猿でもないのだ。尊い尊い、人間なのだ。

これをはつきり知らなければならぬ。

第二に、此の自分と世の中との關係を知らねばならぬ。

世の中は、此の尊さを認めてゐるであらうか。何の理由もないのに、冷い心で見てるはしないか。差別をしてゐるはしないか。もし、そんなことに出會つて、頭をうなだれてゐるやうなことはありはしないか。——だとすれば、全く自覚のないことだといはねばならない。人間として尊いこと。差別をうける理由のないこと。こ

んな誤りを、自分たちがほんとうに目ざめることによつて、世の中から取り除かねばならぬことを、はつきり覺悟しよう。

【體操】

第一部第六教課中の體操(4)を元氣に十回位、繰り返す。
深呼吸五回。

【質問】

今日のお話に對して、何か質問が無いかね。
……今日のお話に限らず、何か外のことでもいゝから、質問があればいゝが……。

【協議】

では、次は、協議にしよう。
誰か協議をして置きたいことがないかね。
……諸君になれば、こちらから一つ出すから、相談して呉れ給へ。
自分の尊さに目ざめねばならないことはよくわかつた。これを今日の生活の上はどうして現はしてゆくか。むつかしすぎるなら、かう言つた方がいゝだらう。——自分の尊さを自分たちの間で、こわしきづつけあつてゐるやうなことはないだらうか。
たしかにある筈だ。考へて呉れ給へ。——わかつた人から言つて貰はう。
悪い名でよび合ふことがあるね。××君、○○さんと言はないで、

禿頭の子供、びつこの子供のある時は、外のものとかへること。

「おい、はげ！」

「こら、びつこ！」

といふ風に。——それが身體の悪いところばかりを指さずに、馬鹿だの氣違ひだのと、相手をよぶことは、よくないことだね。ことに仲よくしなければならぬもの同志が、そんなことでは、駄目だからあざ名をよんだり、悪しきまに言ひ放つたりすることは、絶対にやめやうぢやないか。
賛成者は手をあげて呉れ給へ。

みんな賛成だね。賛成した以上、必ず實行しなくては駄目だよ。いいかね。

【高唱】

第一部第六教課のものを行ふ。

協議によつて多少、元氣のなくなりすぎた氣分を高めに、行ふのである。みんなの意氣が昂ければその必要はない。

【第二話】

秋晴れの日だ。

百舌鳥は疇高くないでゐた。

まつ蒼な空を見てゐると、百舌鳥の高なきを聞いてゐると、何か知ら、心がたかぶつて来る。

こんな日曜に、凝乎としてゐるのは、とても無駄だ、と勉強したあとで英一君は考へた。

「お母さん、夕方まで遊びに行つて来るよ」

既に團の組織をしてゐるのでから第一部のやうに、興味中心のお話よりも、内容本位のものにする必要がありません。

英一君は、田甫の方へ飛び出した。

折よく庄太郎君が、小川のほとりで歌を歌つてゐた。

「おい！ 庄太郎君！」

「英一君か？ いゝ天気だね」

「いゝ天気だ、飛行機へのりたいな」

「あの青空を、ぶんぶん、飛びまわつたら、愉快だらうな」

……時雄君が来た。

「——時雄君、飛行機へ乗つて、あの蒼空を飛びたくないかね」

「あゝ、飛びたいよ。だから僕は、八幡山へのぼらうと思つてゐるのさ」

「山へのぼつて、どうしやうつていふんだ」

「あの山のでつべんで両手をひろげて、プーウ、プーウといつて二三度、身體をまわらせて見たまへ。全く飛行機から見下してゐるやうなものだよ」

「はッは……。」

「はッは……。」

二人は笑つた。そして「行かう……。」ともう、馳け出した。

阪が急にけはしくなつた。

三人は、少し苦しくなつて来たので、そろ／＼と歩いた。尾花は、銀色に光つてゐた。しぶ柿が、ま

つ赤にうれてゐた。

「山はいゝね」

「もう一息だ、かけ足！」

時雄君の聲に合はせて、二人は

「かけ足！」

と叫んだ。……と、もう、絶頂にまでのぼりついた。

「さあ両手をひろげやう」

「とびのやうに、ゆつくりと輪をかいて三度まはらう」

「はゝゝゝ」と笑ひ乍ら、三人は温い陽光の下を、ぐる／＼とまわつた。

「あゝ、この飛行機は目まひだ。」

「こつちの飛行機も目まひだ。」

三人は、大笑ひしながら、どつかりと腰を下した。

××川は、絹のやうに白く光つて流れてゐた。汽車は、玩具のやうに走る。黄金色に熱れた田甫は、小さな布切をつぎあわせて、珍らしい模様を形づくつてゐる。

「あれが僕等の町だね」

英一君がさういつた。

「その向ふが、田安君の字で、その左りがわが新庄君たちのところだね」

「あの森の蔭の白い壁の多いのがX町かね」

「さうだよ。いゝ家並だね」

「すると僕等のところは、よほど悪いね」

「農業だから……。」

「農業でも、新庄君や田安君の字は、もつといゝぢやないか」

時雄君は、不思議さうに、首をかしげた。

「どうしてだらう？」

「貧乏だからぢやないか」

「どうして貧乏なんだ？」

「働かないかしら」

「よく働いてゐるぢやないか」

「それにどうして貧乏なのだ」

「わからない。」

「僕は思ふね、ほら、何だか僕等のところは、わけへだてされてゐるだらう。そんなことがらぢやないか」

「さうかも知れない」

「そんなことがあるたらうか。——さうすれば、僕等がしつかりして、そんな間違ひをとるやうに働か

一般差別が、經濟上にはつきりと影響してゐることを教へるのです。

ねばならないね」

「僕等の村で、そんなことを考へてゐる人があるのだらうか。」

「さあ、——少しはあるだらう。が、みんな目をさまさねば駄目だ——。」

「さうだ」

「さうだ！」

三人は聲をそろへて、力強く言つた。小時、考へ深い沈黙がつゞいた。

やがて、英一君が言つた。

「此の次の日曜に、僕等の友達づれで此所へ上らうぢやないか。そして、みんな、目をさまさねばならぬことを、話し合はうぢやないか」

「賛成！」

「僕等は、今に、あの自分のあとつぎをしなければならぬのだから！」

三人の希望と力に満ちた顔に陽が照りつける。百舌鳥の聲も、前にはまして力強く聞える。

その時だ！

ほら、ほら、むかふの山の影から、飛行機が、此の村ではとても珍らしい飛行機が、勇ましいうなり

聲を立て、だんだん近よつて來るではないか。

三人は思はず、萬歳をさげんだのであつた。

【静座】

第二話で、かなり興奮し、熟考しなければならぬ気持ちになつたのを、そのまま深めてゆくために、静座をする。

静座は、女兒ならば普通の座りかたでいゝ。男兒ならば、あぐらをかいた格構に座つて、右、又は左の足を片方だけももの上にあげる。(正座すると足がいたみすぎるから)



胸をはつて、あごをひき、目を静かに閉ぢ

て、呼吸を少しながく静かにする。その度毎

静に、少しづつ下腹に力が充つるやうに導く。

手は、短く膝の上で組む。

始めは、オルガン又は蓄音機などに心を集

中させて亂れないやうに注意する。

座 静座がある一定の深さまで這入ると、いつ

の間に、オルガン、又は蓄音機が止んだのか

と思ふほど静かに、その音をとめて、一心に

深く深く、考へさせ、やがては虚無の世界にまで這入り得るやうに導くのである。

【音樂】

『團』の歌の合唱(充分練習が出来てゐない時は、第一節だけでも歌ふ。)

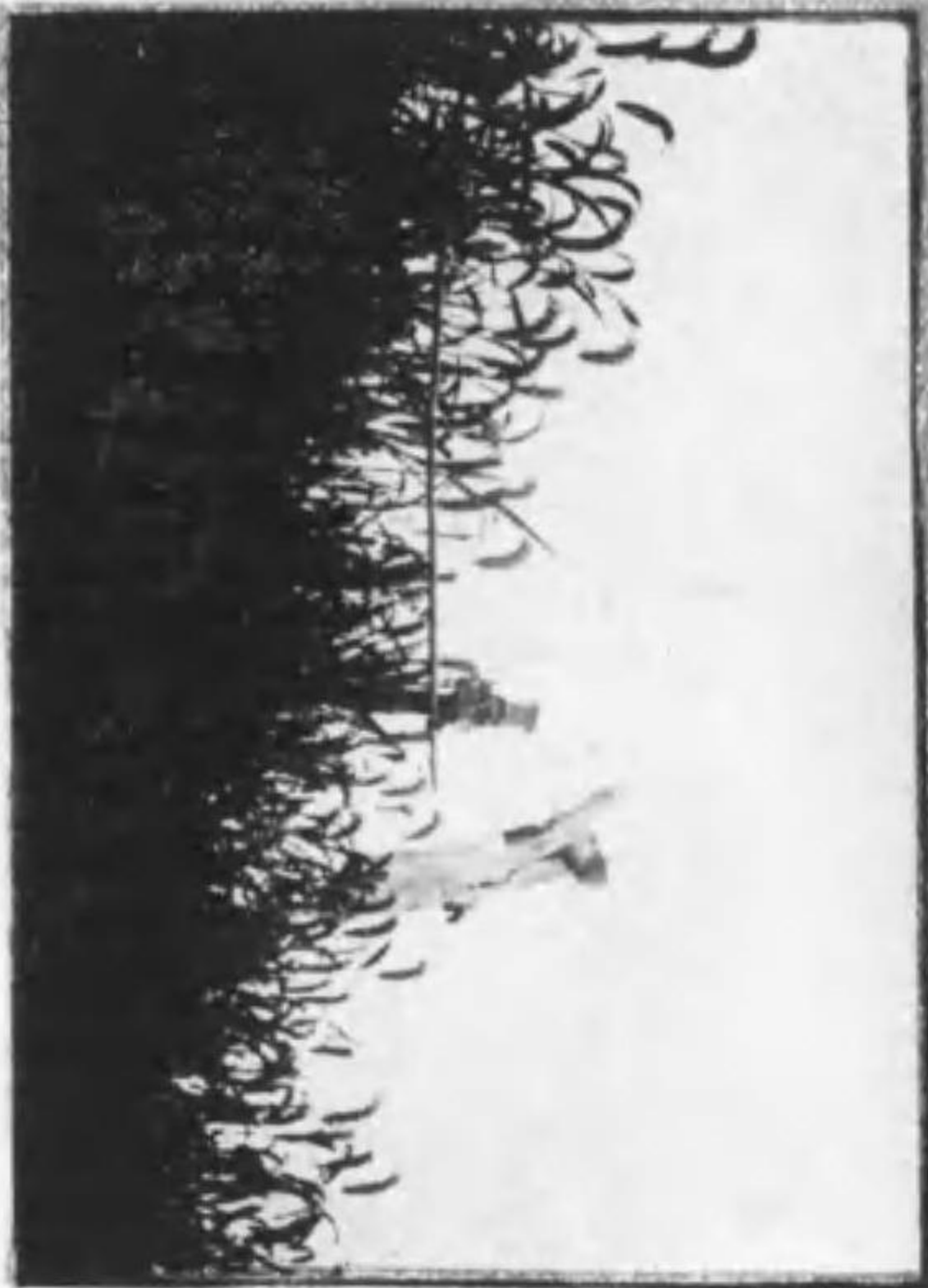
【挨拶】

指導者から「さようなら」

全員つゞいて「さようなら」を元氣に言ひ交して解散する。

【揭示】

第一部中のもと同じやうに、團員があつまるまでに、よく見やすいところに掲出して置くのです。機会があれば、多少の説明を加へることも必要です。



こころ
おなじ
かじり
人間は
ない
自覚の

かじり
山田にさびし
両手ひろげて
すいめは元気でよつてくる
いのちない 身のかなしおは
風に吹かれて くるばかり……。

第二教課

【目的】

本教課は、組織の重要さとその力の強さを教へるのが目的です。

【點呼】

前のあつまりで約束した通り、班長から、缺席者の名を言つて貰はう。

【朗唱】

朗唱の要領はよくわかつてゐるだらうから、今日は第一班で誰か『獨唱』を受持つて貰はう、次のあつまりには第二班、その次は第三班と。順々に交替で——。

(上手にゆかない時は、適當な時、代つて導いてゆく)

【音樂】

團歌練習。

練習の必要がないとすれば一回合唱する。

【第一話】

一人一人が目覚めるといふことは、大切だ。

併し、目覚めた一人一人が、別々な行ひをしてゐたのでは強い力にはならない。みんなが心を一つに

圓座ばかりをつくらずには、班別一行列をつくと気分が轉換します。朗唱を指導するものは、全團員の前に出て、むき合ひに座る。

元就の話は團員中の一人に話させて改めて指導者から此の事か力説するのも効果的です。

雀は群れ居ることによつて鷹の難を逃れ、雁は列をなつて飛ぶことによつて敵にそなへるなごも一つの例です。

本教案は、男兒中心に考案して、女團に就ては少しませぬ。利用者に各位によつて適宜に更改をねがひます。

するのだ。

毛利元就の話を知つてゐるだらう。三人の子供に、弓の矢を一本づゝ與へて、これを折らせた。三人

は、やすやすと折ることが出来た。

今度は、三本を合せて折ることを言ひつけた。

一本を折ることが出来たけれども、三本は折ることが出来なかつた。

父は子等に言つた『團結は力だ。兄弟仲よく力を併せよ』

と。

(1)は(1)の力よりない。

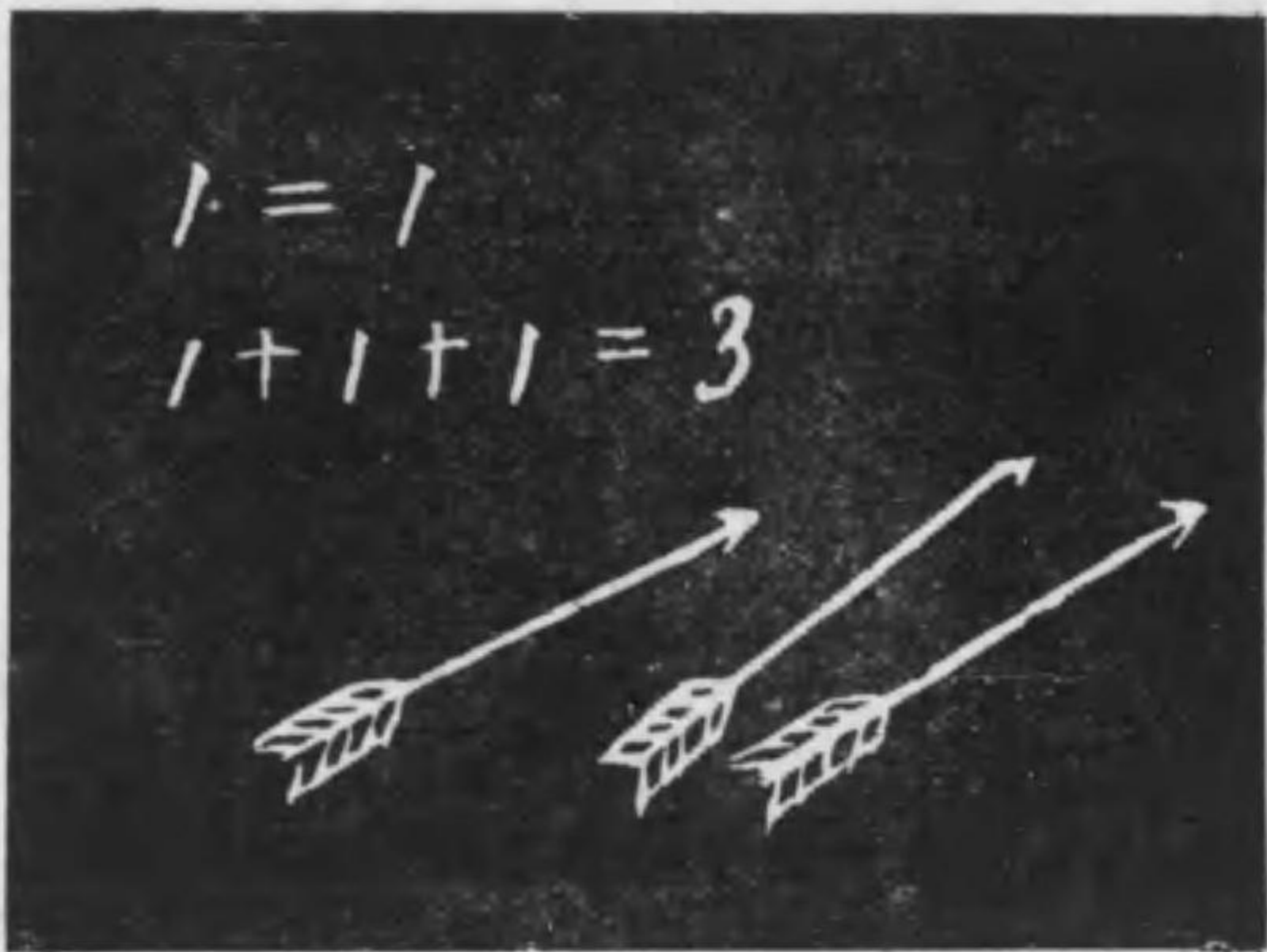
$$1+1+1=3$$

(1)を三つ加へれば(3)の力が出来る。

諸君が別々なころで、別々なことをやつてゐたのではとても弱いものだ。併し、此の三十人が、此の三十五人が心をあはせて御覽。どんな強い力になるかも知れない。

それならばこそ、諸君は××少年團(少女團)をつくつてゐるのだ。此の少年團(少女團)の力を完全に生かさねばならない。

一ばんいけないことは、わづかのことで我儘を言つたり、氣儘をふるまつたりすることだ。協議でき



めたこと、班長会できめたことなどは、きつと遵守らねばならない。

我儘な心が起つて來たら、團結は力だといふ言葉を思ひ出すといふ。もしわが儘なものが出て來たらば、各班で、反省するやう親切に注意しなければならぬ。班で話してわからなければ、團長から全團の會議にかけて充分な解決をはかるのだ。

そして、全團員が、まるで一人の人の手や足が、自然に働き働くやうに、ほんとにいゝ團結をはからねばならない。

【質問】

質問がないかね。

なければ、こちらからたづねやう。

(1)何故團結すればいゝのか。

(弱い力を強くすることが出来るからといふ風に導く)

(2)僕等の團では、團員がどんなに心がけてゐなければならぬか。

(團結を第一とし、我儘な心が起つた時は反省するやうにしなければならぬといふ風に導く)

【體操】

第一部第一教課、體操(1)、(2)、第二教課體操を行ふ。

體操(5)

(此の體操は六人、八人、十人又は大四陣をつくつて、奇數偶數にわかつて團體々操とすれば、増々

體操は第一部第二部共通にて番號を追って行きます。

前の協議を實行してあるかどうかが充分たゞしておくがよいのです。

協議題に就てはそれとなしに、適當な團員に發言せしむるやう——しかも自發的な意味を失はないで——豫め下地をつくつて置く必要がありません。

興味が出て來ます。



【協議】

何か協議したいことはないかね。

なに、ある？ 第二班の方から協議があるさうだから、説明をきくことにする。(第二班長、中央に出る。協議の内容を説明する——僕等は、かなり無駄な金をつかつてゐるやうに思ふ。買ひ食ひなども相當やつてゐる。これを何とかしなければならぬと思ふ——)

今、第二班長からの協議は大變、いゝことだと思ふ。無駄をはふいて何とかしやうといふのだが、その何とかするといふところを諸君で相談して貰ひたいのだ。

(各自の意見を提出させて、簡易な貯金組合をでもつくるやうに導く。そして、貯金の方法、金額など協議すること。但し、無産兒童に對して過重な負擔でない様に充分注意すること、を忘れてはならない貯金組合を結成することは金銭を貯蓄することが第一目的でなくて、節制自重の訓練をすればいゝので、消極的な經濟教育を行ふところに目的がある。)

【第二話】

お話は前のつゞき。

英一君、時雄君、庄太郎君の三人は、次の日曜を約束して山を下りた。

「ちや時雄君は街道から北側だよ。英一君はお寺から西、僕は——僕の附近、街道の南側だ」と受持區域を、もう一度思ひうかべて見るのであつた。

三人は、村の少年たちに山上りをすゝめるのに、ちやんと區域をきめたのであつた。恰度、諸君が、班々でお仕事をやるやうに。

そして元氣にわかれた。

「さようなら！」

「さようなら！」

——ところが。

總ては、思つたやうに簡單にすゝまなかつた。

十四五丁もある町の活動寫眞館に、新しい興行があることに、廣告の旗をもつて歩いて——學校を休んででもだ——入場券をもらつては、市川百之助がどうだの阪東妻三郎がかうだのと、自慢げに話しては、目を白黒させて棒切れの刀をふり上げる眞似ばかりしてゐる。金造君や、爲一君、それに、講談本がとてすすきで、調子にのつて流行唄を歌つたりする愛之助君などが、

「今度の日曜には、兵隊ごっこをするから、××橋のところを集れ。みんな鐵砲になるやうな竹を持つ

總ての運動にははつきりとした責任區域を定めることが何より大切です

て来い。隣村の子供たちと喧嘩になるかも、知れないから、小石をどつきり拾つて来い」といふやうなことを言ひふらしたのである。

「面白いなあ」

「川原で石の投げ合ひをやるというなあ」

腕白な子供たちは、よろこんで、この兵隊ごつこに賛成をする。

英一君たちは困つた。

諸君だつたら、どうする？

三人は金曜日の時雄君の家に集つた。どうするかに就て、相談をした。

「僕は、村の少年全部があつまらなくてもいゝと思ふ。始めだからね。」と庄太郎君は言つた。「で、ほんとうに僕等の考へに賛成して呉れるものだけでいゝぢやないか。五人でも七人でも——」

それに對して時雄君が答えた「さうだ。さうだ。始めは小さく、そしてだん／＼大きくしていつて、僕等の村全體の少年の集りにすればいゝ。」

其所で土曜日は、その考へのもとに、山のぼりをすゝめた。

金造君たちは、兵隊の少なくなることを怖れて、山のぼりのつまらなさを少年たちの間に説いてまわつた。

——日曜の朝が来た。

よく晴れた日曜の朝だ。

約束の時間になつた。山上りの一隊は十八名になつた。英一君は、ほんとううれしかつた。

——山の上では、前の日曜日と同じ話が繰り返しかへされた。

「僕等の村が一ばん見すばらしいのだ」

「その理由をたゞさねばならぬ」

「そして僕等が一生懸命に働いて、いゝ村にしなければならぬ」

「それがために、僕等で少年團をつくらうぢやないか」

「心をあわせて、力になり合ふことは一ばんいゝ事だ」

「僕たちだけでやれるだらうか——しばらく誰か、たすけてもらはなくては」

話は、どんどん進んだ。

少年たちは、實際、山から見下して、ほんとに、何とかしなければならぬことを痛いほど感じてゐた。だから、心から此の事を賛成するのだつた。

「ぢややらう。どんなことがあつても、我々はくづれないで」

みんな、がつしりと腕を組み合つた。太陽は、希望ある少年達を讃めるやうに輝いてゐた。

「兄弟、しつかりやらうぢやないか」

「兄弟、しつかりやらうぢやないか」

誰言ふとなしに、そろつて、大きな聲で叫んだ。その叫びは、澄み切つた空氣をとほして、太陽にまでとゞくやうに思はれた。

その時、麓の方から、ウワーツといふ聲があがった。そして、竹切れをもつた少年たちは、山の頂きめがけて押寄せて来るのであつた。

金造君たちの一隊だ。

山頂に誓ひ合つた、よき少年たちを、襲はうとしてゐることは、すぐわかつた。

「どうするかね」

「悪いやつ等だ。やつつけてやらう。」

「悪いやつらだから、教へて僕等の仲間に入れやうぢやないか」

みんなは口々に言つた。

「僕は思ふ——今は喧嘩をする時ではない。また、言つたつて、すぐ聞くやうな金造君たちでもない。だから、僕等は、そつと裏道から歸るのだ」

誰かどさう言つた。と、

「逃げるのか。」

「卑怯だ！」

と言ふものがあつた。

「いゝや、さうではない。今は僕等にとつて一ばん大切な時だからだ。相手にならないのだ！」
前の聲が力強く言つた。

「さうだ」

「さうだ！」

「さういへばさうだ」と、前に「卑怯だ！」と叫んだ少年も賛成した。

十八人は、急いで裏路を下りた。

そして、麓の森まで来た時、八幡山の頂で、金造君たちの、

「萬歳！」が、とどろいて来た。

麓の十八人は、につこりと笑つた。

諸君！

諸君は、逃げるやうに山を下つた十八人と、山上で「萬歳」をとなへた少年たちと、どちらに最後の勝利があると思ふか。

【静座】

第一教課同様。

静座の心境、相當深くなつた時、靜かに低音で話す。

……我々は、最後の目的にむかつて、まっしぐらに進まねばならぬ。

どんな、困難に出會つても、どんな苦痛に出會つても、堪へ忍んで、目的をはたさねばならぬ。道草を食ふこと。

方角を取かへること。

我々の一ばんおそるべきことは、目的を忘れることだ……。

【音樂】

團歌合唱。

【挨拶】

第一教課同様に行つて解散する。

【揭示】

前同様。



一本の わらは 一寸した風にも ふきちらされるでせう。
けれども たばねて つみかさねられた すしきは 少々せうくの風位には平氣へいき
です。しかも この すしきは 大地の底そとにしつかりと根を下した 樹きに
結むすばれてゐるのですから 強つよいはずです。

幼おきないものも よい指導者みちびきてにむ
すばれたときは とてもつよ
いものになります。たばにな
らう。みんな一つこゝろにな
らう。
そして よい世よの中なかをつくり
上げやう！

第三教課

【目的】

本教課は、身體鍛練の重要さを教へるのが目的です。

【注意】

本教課は、稍もすれば、改善主義に墮しやういので、充分な注意を要します。
また、第二教課の協議で決定した貯金組合が順調に進んでゐるかどうかといふ事に就いての注意を怠つてはなせりまん。

もし、全團員中に、貯金してゐないものが一人でもある場合は、その家庭の事情などを内々調査して貯金の可能性があり乍ら之を怠つてゐるならば、注意をうながす要があります。

【點呼】

前同様。

引續き二回三回の缺席者があれば、班長を通じて、出席の督促をしなければなりません。

【朗唱】

前同様。

第二班によつて、これを指導。

【第一話】

随分、さむくなつて來た。昨日などは粉雪がちら／＼ふつてゐたね。
十二月、十二月。



すぐみんなで一つづゝ大きくなる。しつかりしなければならぬ。

しつかりする——つて、一體、どんなことだらう。誰か

答えをする人がないかね。

身體と精神とを丈夫にする、鍛練する。これが必要だ。

今日も、大分、風邪をひいてゐる人があるやうだが、病氣では、どんないゝ事を考へても行ふことが出來やしない

第一は身體だ。

われ／＼の少年團では、いつも體操をやつてゐる。胃腸を丈夫にし、呼吸器を丈夫にし、ぐんぐんと壯健たくしやにのびてゆくのだ。風でも雪でも暑さでも、なんでもやつて來いといふことが出來るやうに、身體の鍛練をしてゆくのだ。體操は必ずやらう。毎日やらう。

それから、もう一つ注意しなければならないことがある。

出來れば、内臟の關係などを示したものです。

衛生といふことだ。

身體に垢をためないことだ。口をあさばんにみがいてゐるだらうか。爪が長くのびてゐるはしないか。

あたまは、ふけて一ぱいではなからうか。

それでは、決して丈夫な身體にはなれない。

それだ、自分一人だけですむこともあれば、みんなでやらなければ、やり切れないことがある。例

へば——あの不潔なものや、ばいきんを足につけて飛びまわる蠅のやうなもの、驅除でも、一人や二人

一軒や二軒でやつたつて何にもなりはしない。

きれいな水の流れてゐる小川に、村中の人が塵を捨て、とても穢くするといふやうなことも、みんなの心がけがよくなければ止められないことだ。

丈夫な身體は、働きのもとだ。何よりも丈夫な身體をつくるために、いろ／＼の注意をしなければならぬ。

【體操】
さあ、身體を丈夫にするため、一生懸命に體操をしよう。

【體操】

さあ、身體を丈夫にするため、一生懸命に體操をしよう。

第一は、首の運動。頭にたまつた悪い血を、じゅんくわんさせる體操。

(體操(2)を行ふ)

第二は、足の運動。重いからだを押つけられてゐた足の血をじゅんくわんさせる體操。

(體操(1)を行ふ)

質問の時間をとること、並に指導者より質問すること、全體の理解程度を察知することによつて、指導者より適當になすこと。随つて今後はこれを省略します

第三は、胃腸を強健にする運動。

(體操(3)を行ふ)

第四は、肺を強健にするための深呼吸をやらう。

(強い深呼吸五回。靜かな深呼吸五回行ふ)

【協議】

今日は何か、きつと相談したいことがあるだらうと思ふ。今日の話聞いて、きつと何か思ひつくとがあるに違ひない。

さあ、一つ眞剣に考へて貰はう。

(爪をみんなで切らうといふ協議。口は必ず磨かうといふ申合せなどを、なるべく自發的になさせる村の小溝などで不潔なところがあれば、共同労働の體驗といふ意味で、清潔法を行ふやうにする。)

今日は、いろ／＼いゝ協議が出来て嬉しいことだね。其所で、もう一つ、大きな協議があるのだがね。

——これは一等むつかしいのだ。

口をきれいにすれば歯みがき粉があるだらう。身體をきれいにすれば石鹼があるだらう。みんなどんな歯みがき、どんな石鹼をつかつてゐるかね。——あの歯みがきや石鹼は、會社で製造して大賣捌所へ行つて、小賣商人がこれを買ひ、そして僕たちの手に這入るのだ。その一つ一つの商人の手をくぐるごとに、口錢をとられてゐるのだから、これを製造會社からすぐ我々の手に入ると、大分もうかるわけだ。ところが一人ですぐ製造會社から買ふといふ様なことが出来ないから、みんなで組合をつくつて、

共同労働で清潔法を施行する時などは、村の人々に、きたなくしておいても少年團が掃除して呉れるといふ風な依頼心を起させぬやう、充分注意して行はればとんでもない不結果に終ります。

共同購入をして、入用者が、それを購ふといふ方法があるのだ。これをむづかしく言へば消費組合つて言ふんだが……どうだらう。こんなものをつくつて見ては？

共同購入をする資金には、みんなが、五銭なり十銭なりづゝを出金するのだ。利益は組合員と組合とに分ける。組合の分は無論、われ／＼の少年團の會計に繰込んで圖書でも購入すればいゝのだ。

(消費組合の成立が出来れば、それに越した事はないし、出来なければ、研究なり準備なりをすゝめるやうにして、適當な時機に設置し、經濟教育の機關として、充分に活用する)

【報告】

團長より全團員への報告。

わが村には少年團だけであつたが、いよく少女團も結成されることになつた。聯絡を執つて充分な活動をしなればならないこと。

第五班△△君から、○○村の少年□□君が差別的な言辭をのべたことに就ての報告が、去る十一日に團長まであつた。幸ひ△△君の努力によつて□□君は充分に差別することの悪さを知つたといふことである。併し、念のため青年團(無論融和青年團)に報告し、その父兄に對して、絶対に左様なあやまちを繰かへさせないやう注意をしてもらつたといふこと。

【第二話】

また、前のお話のつゞき。

英一君たち十八名の、一ばん始めの集りには、

一、兄弟少年團と名をつけること。

二、團長には山田英一君がなること。

三、三班にわかつて、班長をきめること。

四、毎月二回づゝ、きつと集まること。

集りでは、勉強をしたり、討論をしたり相談をしたりすること。

五、融和青年團の××さんに指導を願ふこと。

六、自分自身のためにも、村のためにも、一生懸命に働くこと。

などが約束された。それは恰度、われわれの少年團と同じやうに。

金造君たちは、これを見て、わらつた。山の上から逃げて歸るやうな、弱虫どもが少年團をつくつたつて、何が出来るものか。今につぶれて仕舞ふだらうと。

そして、折があれば悪口を言つたり、喧嘩をふつかけて來たりした。

兄弟團の十八人は、どんなことがあつても、とりあわないで、につこり笑つてゐた。

ある集りの時であつた。

○○君が、此處ことを言ひ出した。

「僕が、きのふ、みんな學校から歸る時、ちつと見てゐたり、僕等の字のものは、どうも頭髮が長くなりすぎてゐるものが多いと思ふ。格構がわるいが、どうだらう」

××君が言つた「格構がわるいとか、いゝとか、僕等は、そんなことを考へなくともいゝと思ふ。け

れどもあまり頭髮ののびすぎでゐることは不衛生だ。何とかしなければならぬと思ふ。」
 すると今度は△△君が言つた。「僕のうちに、バリカンがあるから、それでみんな刈り合ひをしたらどうだらう。」

「いゝ事だ」と、みんな賛成した。

ところで××君が「でも、△△君のうちのバリカンをかりてばかりゐることはいけない。それより、みんなで購入へばいと思ふ。」

それからバリカンの値段だとか、みんなで、いくらづゝ出せばいゝとか、散髪をし合ふ日だとか、いろいろと相談の上、△△君のお父さんが町へ行くついでに買つて来て貰ふ相談までした。

さんばつの日が来た。

□□君を××君が刈ることになつた。馴れないものだから、とても頭髮を引ばつて仕様がな

「痛い？」

「痛い、いゝよ、いゝよ」

「一生懸命うまくやつてゐるのだけれど、うまくゆかないのだよ。我慢して呉れ給へ。」

「いゝよ、いゝよ。どうせ始めたもの」

ぎごちない手つきで、段々と刈つて行く。刈つて行くといふよりは、引きちぎつてゆく、といふ有様だ。

××君などは、ぼろ／＼と涙を流し乍ら笑つて辛抱した。

その日、六人の散髪が出来た。

石鹸できれいに洗つた六つの頭がならんだ時、みんなは非常にうれしく思つた。

しかし、よく見ると、何だ山畑のやうに、段々が出来てゐた。此所もいけない、此所もいけないと、やつてもやつても、山畑だんだんは、なかく／＼とれなかつた。

「いゝや、いゝや、始めたもの！」

みんな元氣であつた。

が、その翌日、金造君たちは手をたゞいてよろこんだ。

「段々だけ段々だけ。青栗いが栗、けちんぼう。」

兄弟少年團のものをさへ見ると、そんなことを言つて囃したてた。

次のさんばつ日には

「また、ひどいこと言はれるのか知ら」

「かまふものか」

「ひどいこと言はれて——けちんぼうだなんて言はれて、さんばつをやつてゐるんだから、これ見ろといふ風に、しやうちやないか。——僕は、思ふんだが、……さんばつをしたものは二錢づゝ少年團におさめる。それを積んで置いて本を購ふか、何かいゝ事をするのだ」

「さうだ、町ですれば二十錢もかゝるんだから——二錢はやすいことだ。いゝことだ」

「だんだん畑だん畑——のいはれ賃が、十八錢か。はゝゝゝゝ。」

「痛い痛い辛抱賃も這入つてゐるんだよ。はッはッ。」
 そんなことを言つてみんな明るく笑ふのであつた。

——けれどもそれも、しばらくであつた。みんなは、すぐ上手に散髪が出来るやうになつた。
 お父さんやお母さんたちも、この事を大變よろこんでゐるやうであつた。
 たゞ、それだけではなかつた。

十八人は、思ひがけなく雪が降りつもつた、早朝凜々しくも鉄をもつて道に出た。そして、雪をみ
 んな、溝におとし込んで通行の便をはかつた。

村の人たちは、このことがあつてから、兄弟少年團は、非常にいゝ子の集りだ、といふことを知るや
 うになつた。

——兎に角、少年團の諸君は、一生懸命にやつた。一生懸命であることが何より愉快であつた。

【静座】

前同様。

静かな曲のレコードを聞かせる。

【音楽】

團歌合唱。

【挨拶】

今日の集りはこれで解散する。但し、班長會議を開くから、班長だけ残つてもらひたい。

「さようなら——」——指導者

「さようなら——」——全團員

【班長會議】

今日の班長會議で相談したいことは、諸君の少年團も組織されて、大分長い月日が経つたから、出
 来るだけ、自分のことは自分でやる、といふ自治主義でやつて貰ひたいと思ふのだ。

で、大體、出来ることは諸君でやつてほしいのだ。

第一、例會のいろいろの指導は團長がやるといふと思ふ。

但し、話だけは、當分、こちらで受持たう。

第二、團の日誌は、書記をきめて、自分たちで、詳しく書けばいふと思ふ。

第三、協議題は、各班で順次に提出して、決議實行してゆくやうにすればいふと思ふ。

どうたらう。もうやれると思ふが……。(全班長の意見を聞いて、背後の指導は充分行ふから、一先づ

諸君でやつて見るやうにすゝめる)

それから、もう一つ考へねばならぬことは、どうも此の頃缺席をする人があるが、出来るだけ缺席の
 ないやうに、各班長から、注意して呉れ給へ。

(班長會議解散)

第四教課

【目的】

本教課は、精神鍛練の重要さを教へるのが目的です。

【注意】

單なる意味に於ける精神鍛練ではなしに、内部として伸びて行かねばならぬ精神方面を充分に力説する必要がある。と言つて、總てをあまり露骨に話しすぎることも、また、被差別者の意識を充分に持つてゐない兒童に對しては考へものであります。その點、充分な注意を要します。

猶、前月の班長會に於て決定した通り、大體は自治的に行はせることにして、大體の方針だけは、不斷に指導者の立場にあるものから、示す必要があります。

今一つ注意すべきことは、團長なり班長會議の意見が、まとまつた場合、非常に脱線的なものでない限り、指導者は、あまり、かれこれ言つてはなりません。

【點呼】

前同様。

【朗唱】

前同様。

正月の會合は、なるべく早くひらいて正月氣分を充分に利用すること。

第三班指導

あまり同様の朗唱で、倦怠を覚えるやうな風であれば、第一章を第一班全唱、第二章を第二班全唱と

いふ風に變更することは、興味を持つて讀みます。

【第一話】

みんな元氣だね。にこ／＼してゐるね。何かうれしいことがあるのかね。

お正月だから笑つてゐるのだね。

一つづゝ大きくなつたからね。

何だか、あの日の丸の旗を見てゐると、にこ／＼したくなるね。

むかふの家にも、こちらの家にも、日の丸が立つ。その

下から健ちゃんも、芳ちゃんも良三君も、眞治君もにこ／＼

と出て来る。全く、お正月はいゝ時だね。

ところで、此處にこ／＼のお正月にも、にこ／＼出来ないことがあるんだ。

何所どこの家に立つてゐる日の丸にも、日の丸にかはりはないだらう。その日の丸の下で暮してゐる我々にも、何のか



小學校其他に兒童中心の差別問題でも起つて、はつきりその事實をみんな知つてゐる時は、抽象的な話ではなしに、事實を指し示して教へる必要があります。

一般精神生活から見て正しい意味に於ける缺陷と認めらるゝ點は、この教課に於て匡正するやうにしたいものです。

わりもないだらう。

それを、何か、かわりがあるやうに、わけへだてするといふことだ。わけへだてされるといふことだ。これは一ばんいけないことだ。

僕たちは、尊い人間だ。わけへだてされる人間ではないのだ、といふことを、はつきりと知つて、ぐんぐんと、まつすぐにのびてゆくことだ。

前月は、身體を丈夫にすることを相談した。どんな立派な身體をもつてゐても、精神がたつしやでなければ、うどの大木であつて、何にもならない。

壯健な精神とはどんなものだ？

まつすぐな心だ——ねちけてはならない。ひがんではならない。つまらぬとあきらめてはならない。

どんな重りにもまけないで、まつすぐに、伸びてゆくのだ。

次は、強い心だ——いゝ事を、どんどんとやつてゆくのだ。自分だけでやつてゆくのではなしに、みんなと一しよに、強く強くなつてゆくのだ。強いものは、よく働く。朝から晩まで、どんなことにでも随分、精を出して働く。

此の、まつすぐな心、強い心こそは、今のわれ／＼の世の中にある、間違ひをきれいに取除く一ばん大事な素因をなすのだ。何といつても、これが大きな力となるのだ。

丈夫な身體、丈夫な精神——。

丈夫な身體、丈夫な精神——。

そして、我々は、正しい、幸福な、よい國をつくりあげてゆかう。

【體操】

第三教課同様のものを團長指導のもとに行ふ。

【協議】

第一班より提出。

僕等は、いつもかうして集つてゐる。そして、いろ／＼と研究したり、實行したりしてゐるが、月に一回(又は二回)づゝあつまり合つてゐるといふことだけでは少しさびしすぎる。

それで、小さな新聞をこしらへたいと思ふ。

僕等に必要なことを、一枚の畫用紙に書く。無論、全團員からの投書をものせるのだ。そして、順々に全團員に回覧するのである。

經費は、畫用紙一枚代あればいゝ。

編輯は、各班順次に受持てばいゝと思ふ。

(賛否を問ふて決議する。——かやうな回覧誌は、少年團には是非必要であるから、なるべく發行する様にとめる。)

指導者から第二協議題を提出。

今の諸君の協議は、大變いゝと思ふ。それと同じやうなことで、もう一つ協議してもらひたい。

畫用紙一枚で、ポスターをつくるのだ。やはり、各班、順次受持ちで、「人間の尊さ」などを書いて、

機關誌は充分文藝的色彩を加へて、兒童の發表欲を満足せしめ、一面作文の指導を忘れぬやうにすること。

時々、村のあちらこちらに貼るのだ。そして、人々に、われわれ少年團の精神を傳へるのだ。
(賛否を問ふて決議する)

【高唱】

新年だ。元氣をつけるために、高唱をしよう。

和ッ！

和ッ！

和ッ—あッ！

【第二話】

兄弟少年團は、ほんとうにいゝ團體だといふことが、お父さんやお母さん、そして村の人々によくわかり始めると、金造君たちは、少しきまりわるくなつて來た。

けれども、今といつて、少年團へ加入を申込みことも變だし、仕方がないので、英一君たちに負けなだけで、いゝ少年團をつくらうと考へた。

「僕たちの少年團は面白いよ。時々、團體をつくつて、町の活動寫眞を見にも、行くのだ。みんな這入り給へ。とても面白いんだから——」

如何にも、金造君たちらしい考へ方で團員をつくらうとするのであつた。

「これは、兄弟少年團にとつては、かなり重大なことであつた。

十八人だけで、村が立派になる、とは英一君たちは考へてゐなかつた。村全體の少年が、一つの團體

高唱は立つて行ふこと。
方法は第一部第六教課中に詳しく書いてあります。

活動寫眞とか、其他放縱な遊びを阻止することは、やがて兒童をして勤勉な生活に導き入れることになるのであるから、此の點に充分注意する必要があります。

内部最近の傾向としての蝸牛頭上のあらそひを双葉の時に抜とるやうにしなければなりません。

員となつて、心をあわせて働くところに、自分達少年が青年となり大人となつてからの村の輝きが生れるものだと深く考へてゐるのだから、別に今一つの團が出来て、何だか別々に競争をしたり——まだ競争だけならいゝのであるが、内輪あらそひなどをすることは、一ばん困つた、悪いことだ、と考へるのであつた。

兄弟少年團では、いろいろ相談した。

そして、お正月の三日目に、少年團が中心に、村の少年を招いて小さな運動會を開くことにした。

XX川の原つばには、みんなの手で描かれた赤い旗、青い旗が打たてられた。みんなとても、面白く遊んだ。

——金造君たちも、始めは白い眼でみてゐたが、とうとうお仕終ひにはランニングの選手に出たり、角力の旗頭になつたり、そして、共同體操の先頭に立つたりし始めた。

「夕ぐれ、運動會は終つた。」

團長山田君が、土どろどろになつた元氣な姿で

「今日は僕等は、僕等の身體をきたへ、精神をみがくために小さな運動會を開いて、大變愉快であつた。たゞ残念なことは、僕等の兄弟少年團は、わづかに十八人よりないから、とても淋しい。今日、運動會へ來て下さつた諸君が、此の少年團へ這入つて呉るなら、そして、力を併せて、自分のため村のため、盡してゆくならば、ほんとうにいゝと思ふが……」

と、挨拶をした。どこからとなく拍手が起つた……。

金造君は、しばらく考へてゐた。が、つかくくと英一君のところへ進んだ。

「僕等は這入つていゝだらうか。——別に少年團をこさへやうと思つてゐただけれど——」

「あゝ、いゝとも。とても這入つてほしいのだ。仲よく、一しよに働けば、どれほどいゝだらう!?」

夕間は、次第に山のすそから廣がつて來た。星さへ、キラ／＼と輝き始めた。

全村の少年が一致團結すべき日は、終に來た。みんなは、がつしりと肩を組んで、兄弟少年團の團歌を歌ひ乍ら、家路をさして、隊伍を整へて歸つたのであつた。

【静 座】

前同様。

【映 畫】

(指導者) 今月は、お正月のあつまりだから、何か諸君をよろこばせてあげやうと思つて、いろ／＼、工面した結果、活動寫眞を見てもらう事が出来るやうになつたのだ。

機械はこんなに小さい。

フィルムも此處に細い。

これでゐて、よくうつるのだからね。むかし動く寫眞といへば、とてもやかましく言つたものだが、此の頃では、こんな小さな機械で、簡単にうつせるやうになつたのだ。科學の進歩だね。

ところで、活動寫眞は、僕等はいつでも見たいのだが、町の活動寫眞館へ來る映畫は、大てい、僕等將來ある少年のためによくはないものが多いのだ。

映寫機は、パターペビの如きものを選ぶと便利である。キード型で三十三圓、普通型は七十七圓位。フィルムは、いろいろ教育的なものがある。二十米一巻の借賃が三晩でわづかなものです。

機會を見ての科學教育

その上、寫眞館の空氣はにごつてゐる、夜がふける、目がわるくなる、といふ風に、とても非衛生的なことばかりだ。

こんな静かなところで、短い時間に、いゝ映畫を見ることの出来るのは、僕等にとっては、一ばんいいことなのだ。

いゝところは拍手するんだ。さあ、うつるよ。

映畫(1) 日本アルプス(實景)

(2) 夜の鶯(少女がわなによつて小鳥をとらへ、かごにつないでおくが、解放の尊さを知つて、自由な世界に放つといふ筋)

(3) 春はまた丘へ(三人の農村少年が、おの／＼自分の目的にむかつて眞面目に進むといふ節)

【音 樂】

團歌合唱—都合によれば短い歌、第一部第五教課『みんなの歌』を歌ふ。

【接 拶】

前同様。

第五教課

【目的】

本教課は、生活方針確立の重要性を教へるのが目的です。

【注意】

年少の時期に、生活の方針を決定するといふことは、仲々困難なことであります。しかし、人間は、何か一つの職業を持たなければ生きられないのだから、それに對する注意力を涵養することは、とても重大であることを教へて置く必要があります。

しかも、それを、實踐にうつし、殊に共同の體驗を與へ、意欲放縱であるとある一方で言はれてゐる内部の性向を轉換せしめるといふことこそ、將來の内部經濟生活の確立の基礎をなすものであります。

【點呼】

前同様。

【朗唱】

前同様。

第四班指導。

【第一話】

働くことは、人間にとつて一番大切なことだ。

ちつとしてゐる水は腐つて仕終ふ。けれども流れ流れて止まる所を知らない水ならば、いつも、清々してゐる。

つかはない鐵は、まつかにさびて仕終ふが、しよつちう使ふ鐵は、銀色に光るのだ。

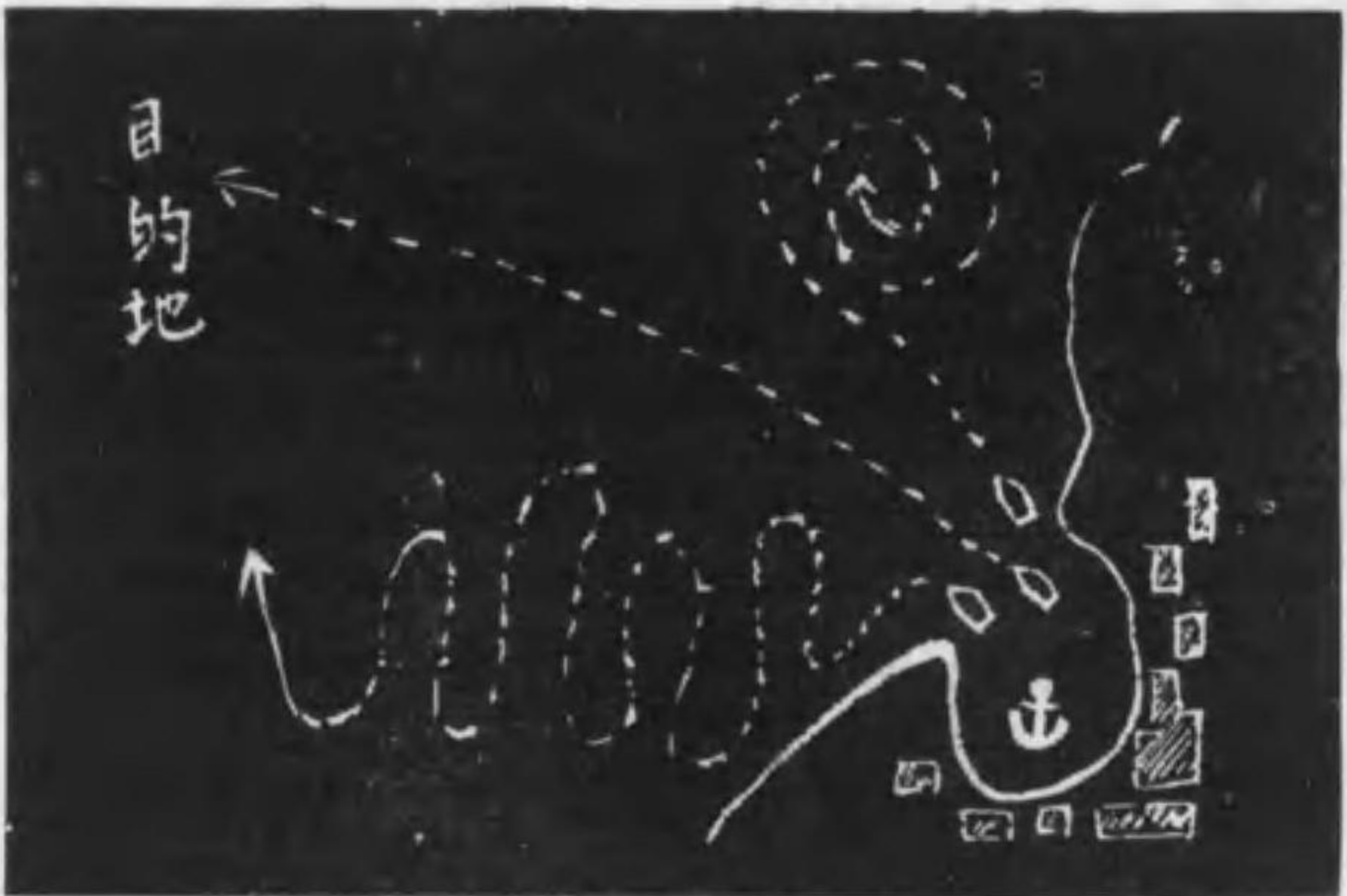
車夫クルマヂの足を見たまへ。とても丈夫に發達をしてゐる。線路工夫の腕を見給へ。筋肉が隆々ともりあがつてゐる。

一生懸命に働く人の身體は、とても丈夫だ。

一日爲さざれば一日食はず——といった昔の人がある。ごろごろと遊んでゐて、生きてゆかうなど考へるものがあったなら、それこそ、大馬鹿ものだ。

僕等は此の身體を丈夫にするためにも、精神ココロの幸福しあわせを自分のものにするためにも、朝は星をいたゞいて起き出で、夜は夕月をふんで歸るといふほど眞剣に働かなければならぬ。

働くのも、たゞ、無鐵砲ムテツポに働くのでは何にもならない。いたづらウラツラに身體カラダをつかれさせ、精神ココロをくたびらせるだけだ。



能動性肥大

——これこそ、自分の一生涯の職業だと考へられることに精を出すのだ。殊に諸君は、まだこれからだ。いまが、港を出てゆく、新しい帆の舟だ。方向を見きわめ、一圖に漕いでゆくならば、きつと目的地に達することが出来る。

いくら漕いだつて走つたつて、目的がなければ、廣い海で、たゞ、うろうろと、ぐる／＼廻りするにすぎない結果になる。

——ある所に、竹籠をあむことの非常に上手な若者と、あまり上手でない若者と二人あつた。上手の方の若者は、

「これはつまらぬことだ」といつて、仕事をかへて仕終つた。そして左官になつた。左官がいやになつて、行商人になつた。いくつもいくつも仕事をかへてゐるうちに、どの仕事をしても心が落着なくて、とう／＼お仕終ひには乞食になりはて、仕終つた。いま一人の若者は、下手ながらも竹籠つくりに一生懸命になつた。次第に上手になつて來た。

「あの籠屋さんでなければ——。」と、みんなから、ほめられるに到つた。といふのだ。農業なら農業でいゝ。商買なら商買でいゝ。自分が、これだ！と思つた職業に力一ぱい精を出さなければならぬ。

僕等はまた子供だから、そんなことを心配なくともいゝ、など考へてはならない。それは、なまけ者の考へだ。

働くといふことは、眞剣であればあるほど面白いものだ。試みに諸君は、何か小さな一つのことでも

いゝから、眞剣に働いて見るがいゝ。それも、一人でこつこつと働くよりも、みんなで力をあわせ元氣をそろへて働いて見るがいゝ。きつと働きの欣びを感じるであらう。言ひつけられていや／＼やるのはなしに、自分でやらうと考へたのだから。

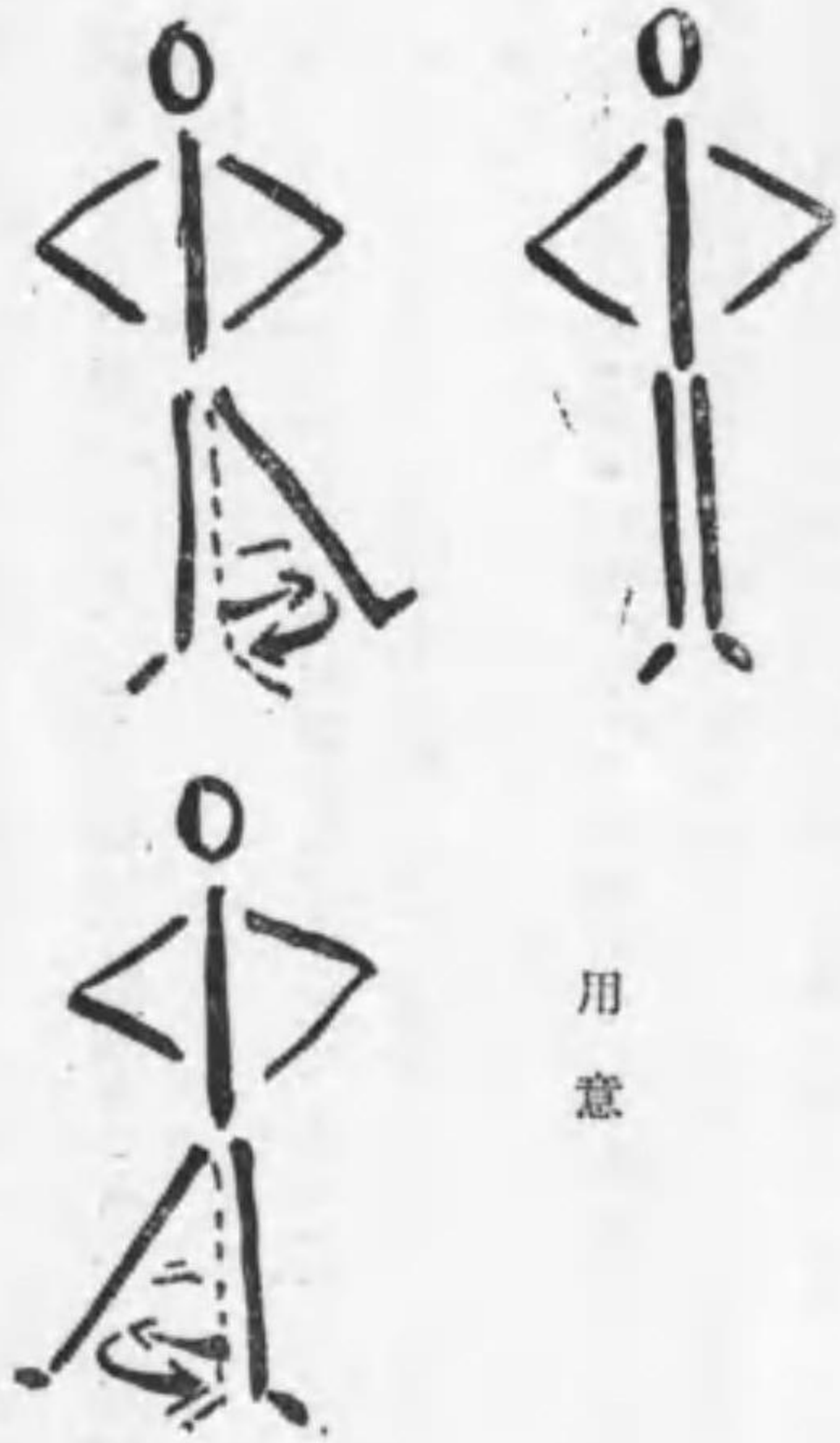
そして、その働きの欣びを味ふ中から、自分の將來の職業といふものを考へ出してゆけばいゝのだ。

【體操】

第三教課同様のものを團長指導のもとに行ふ。

新しい刺激を與へる意味に於て、指導者から、次の體操を教へる。

() 體操



用意

(本運動は跳躍的に軽く早く行はねばなりません。)

【協議】

第二班より提出。

僕等は學校から歸ると大てい遊んでゐる。ことに冬は、草刈りにも出られないんだし。……で、みんな働きをこさへたいと思ふ。

菓を三把ぐらゐるづゝ、お父さんから貰つて來るのだ。そして、それを打つて、繩をつくりたいのだ。

(賛否をとる)

次に指導者より。

繩を手でつくるといふこともいゝかも知れない。けれども、今は立派な、とても早くつくれる製繩機といふものが出來てゐるんだ。手と、これとで競争をしたんぢや、とても手の方は大負けだ。これからは、どうしても機械の力といふものを出來るだけ利用してゆかねばならない。で、その諸君の持つて來た菓を材料に製繩機の使用方法を練習しやうぢやないか。製繩機は僕の方で借りるあてがあるんだから。

(賛否をとる)

それからもう一つだ。

繩をつくるといふこと一つだけを練習したら、もう働かない、といふのでは、駄目だ。大體我々は農業でやつて行かねばならないんだから、もう少し農業方面で、一しよに働きたいものだ。

XXさんのやつてゐる果樹の剪定が始つてゐる。あれを練習がてら手傳ひに行かうぢやないか。

それから、△△君ところのお父さんが長いこと病氣だし、お母さんは赤ぢやんであつて、思ふ様に働

共同作業は、事故がある團員には強制してはなりません。けれども、けれどもなるべく出席するやうにしないと、共同作業の目的にはづれることになりません。

けない。麥畑の世話が、少しも出來てゐないから、みんなでやらうぢやないか。いゝ働きの練習だ。樂書をして遊んだり、鬼ごっこをして遊んだりする時間に、みんな出來るのだから——」。

(賛否をとる。)

【音樂】

著音機を聞かせる。

プログラム

- (1) からたちの花 (獨唱)
- (2) 荒城の月 (尺八)
- (3) 雀の學校 (合唱)
- (4) ジョスランの子守唄 (器樂)

【第二話】

英一君、金造君たちの少年團は、同志の數も増へるし、氣持ちもびつたりと一つになつたし、全く、力強い團結だ。

これからは何でも出來る！

みんなは、力を併せて、働くことを考へるのであつた。

第一、村の休日に、半日だけみんなで共有野山の雜木刈りをした。その利益金で柿の苗を買つてみんなの家の空地にこれを植えた。

下記のレコードは少し著音機を好む家に就て備れば、大體揃ふ程度のものです。

——早く芽を出せ、出さぬと缺で、はさみ切る。早く實がなれ、ならぬと缺で、はさみ切る——。

みんなは、全く、引のばしたいやうに柿の木の世話をした。

第二、農事試験場へ行つて、促成野菜や果樹の栽培に就て話を聞いて、自分たちも大人になれば、きつと出来ることをたしかめ、たゞ、それだけでなしに、石垣の間を利用して苺を採集する方法などを覚え、試験場でまびいた苗などを貰つて、二株三株とみんなで植えた。

——これは柿とちがつて、五月になれば、赤い赤い眞赤なルビーの實になるんだから、みんなはとも楽しみに、これを作つた。そして、誰が一ばんいゝ苺をつくるか。一等二等をきめやうではないかといふやうな相談をした。遠い國では、さうして作つた苺で、村の生活をたてなほしたことを聞いてゐた少年たちは、何か知ら、此處小さなことからでも、大きな幸福を創り出せるやうに思ふのであつた。

第三、町の工場を見學して、機械の働きのすばらしさに打たれた。何一つ無駄のない、しくみに吃驚した。そして、自分たちの農村にも、かうした無駄のない——科學的な働きのしくみがみんなの力を協せることによつて出来なければならぬことを知つた。農業經營に必要な機械類のカタログをとりよせて、今すぐにそんなことが出来ないまでも、自分たちが大人になる頃には、きつとさうせねばならぬことを感じたのであつた。

殊に庄太郎君は、機械のことを考へるのが好きであつた。あの方圓の器に隨ふやさしい水が、高いところから落ちる力で、燈もともすれば、大きな機械を動かせる電力が生れるのだ、と思ふと、庄太郎君は、どうしてもあの××の川を流れてゐる水、八幡山の向ふで、大きな瀧をつくつてゐる、あの川の水

團結共同の生活とはいへ、特に才能のあるものを殺すやうなことをしてはならぬことを教へて置かねばならませぬ。

を利用して、發電所をつくり、村の燈をともし、精米機を動かさせたなら、高いお金を電燈會社に支拂ふことがいらなくて、どんなに利益であらうかと考へた。

で、いろいろとむつかしい本をよんだり、小さな機械を買つて、試験をするのであつた。——これやがて、實際に現はれて来たならば、村の人の働きは五倍にも七倍にもなるであらう。そして、そのついでには半分にも三分の一にもなるであらう。

團員は庄太郎君の研究や仕事をたすけるために、いろいろの手傳ひをした。實際勝れたものは、どんな成長させなければならぬことを、全團員は、はつきりと知つてゐるから——。

兄弟の少年團の諸君の働きは、ますます村のお父さんやお母さんたちの心を、動かすやうになつた。村の人たちは、つねに研究をし、つねに勤勉に立ち働いた。そして、平和な、しかも希望に満ちたあけくれが、此の村に訪れるのであつた。

ある日、

「山脇の三郎さんが歸つて来る」

といふ話が、村人の耳から耳へ傳へられた。山脇の三郎さんとは、小さい頃、お父さんお母さんに死に訣れて、七つになるまで、伯母さんに育てられてゐた。が、不幸な時は不幸が重なるものであつて、その伯母さんも急に亡くなつたのであつた。

村の人たちは、よるべのない三郎君を氣の毒に思つて、あちらの家で三日、こちらの家で七日といふ風に、子守をさせたり、用きゝをさせたりして養つてゐた。ところが、九つの時、町の有人が

徒に都をあこがれても仕様がなはいふことを、はつきり教へて置かればこんな話を通じて都會熱などが燃えんになつては困ります。

「わしが使はう」

と、東京の方へ連れて歸つたのであつた。

人の噂も七十五日といふ。

村の人たちは、いつの間にか、三郎さんのことをすっかり忘れてゐた。

折々、二從兄になるころへは、三郎より、として、元氣に働いてゐる、といふやうな、はがきが舞ひこむ位のことであつた。

いつの間にか、二十年あまりの歲月が流れた。

「……山脇の三郎さんは、とても成功してゐるさうだ」

「今度は、お墓参りに歸るのちやさうなが、ふた從兄の道つあんさへ、もうよく顔を覚えぬといふ。」

——實際山脇の三郎さんは、苦勞に苦勞を積んで、成功したのであつた。そして、久しぶりに故郷へかへつて、村の人人にうけた恩義をかへさうといふのである。

……東京電器具製造所、山脇三郎。さうした名刺を區長がもらつて、電氣のことなら、少年團の庄太郎君が氣狂ひのやうに研究をしてゐるから、會つて教へてやつて頂きたい、と挨拶に加へた。

「庄太郎君の熱心に、全く動かされました。村の方々に御恩返しをどうすればいゝかと、思ひ悩んでゐたさきです。幸ひ私は電器具を製造してゐますから、村の發電に必要な器具一切を寄贈致しませう。庄太郎君が總てをやつて呉れるでせう。もしわからぬ點があれば、技師をよこしませう。では、いろいろお世話になりまして有難う。また参りますから、みなさん御たつしやで——」

いそがしいからすぐ歸るといつて、三日目に村の小さな停車場のプラツトホームに立つた山脇の三郎さんは、區長さんや二從兄、そして親切な村の小父さんたちに、さうわかれの言葉をのべたのであつた。飛行機のやうに、飛んで見たいといふ、空想は大地の上にながつしりと打樹てられる日が來た。やがて、此の村は、電化される。

モートルがうなりをたて、人間の五倍七倍の仕事をなすであらう。科學の村、萬歳だ、協働の村、萬歳だ。そして、兄弟少年團、萬歳だ。

……かうして、われ等の愛すべき少年たちも、力強く、われ等と同じやうに力強く、人間解放の一路を大象のやうな足どりで進むのであつた。

【静座】

前同様。

……われはく、少年だ。

けれども、誰よりも眞剣に、どうすれば、よき日が來るかといふことを、考へ行なつてゐるのだ。

考へれば考へるほど、われく、のなさねばならぬことが多い。行へば行ふほど、われく、の力の足りないことを感ずる。

一生懸命に勉強しやう。

村をうけつぐものとして準備を、完全に整へて置かう。

われわれは、今は、一ばん大事な準備の時だ。今、充分な準備を怠るならば、將來決して立派に働か

が出来ないであらう……。

【音楽】

團歌合唱。

【挨拶】

解散後、班長會議を行ふから班長は残るやうに。

「さようなら——。」

「さようなら——。」

【班長會議】

指導者より。

三月は、學年末だ。別にわれ／＼の少年團には學年末も何も無いけれど、みんなのこころ持ちが、どこまで進んでゐるか、といふことを知り合ふことは、いゝ事だから、各班一人づつ、五分間位づつ、お話をすることにしやうぢやないか。

そして、それがすむと、自由座談會をひらいて、何でも思ひ思ひに話し合ふことにしたい。

で、話の題と氏名を、次の集りの二日前まで、各班長から、團長の方へとつけて貰ひたいのだ。

もう一つは、各班別に、何でもいゝから特色のある仕事をしてほしいのだ。全團員でやることは、うまくやれるやうになつた。これは、團長なりがついてゐて、みんなが一つの機械のやうにやるのだから出来る筈だが、自分たちで考へて、これが一等いゝと思ふことを各班で行つてまあ競争をやつて、見る

各班別に事業部、研究部といふ風な方法をとることも面白い結果が出て來ます。



□ 花壺。茶碗。きゆうす

おの／＼ 自分のつとめがあります。

□ きゆうすに 花をいけることも 花壺で

茶を入れることも出来ません。

□ 人はおの／＼ 特長をもつてゐます。

特長を生ずことは一ばん大切です。

□ 職業を選ぶにしても わが身を忘れて

不似合なものを選んではなりません。

のだね充分考へて、班員に相談して、みんなが、あつと。吃驚するやうないゝことをやつてほしいのだ。但し、金をつかつたり、無理強ひをしなければならぬことはやめて置く方がいゝ。

各班長に何にも意見がなければ、班長會議はこれで解散する。(意見があれば慎重に討議する。)

【揭示】

前同様。

第六教課

【目的】

本教課は、第二の責任者としての重責を教へるのが目的です。

【注意】

本教課は、前五教課を完結するといふ意味に於て、かなり重要な性質を持つてゐます。意見発表をさせることも、自由座談會をひらくことも結局は、總決算といふ意味に外ならないのであります。

【音楽】

希望に満ちた春を迎へる意味に於て左の歌を練習する。

春進み

- 一、積みし白雪 そと、とけはじめ
吹くや北風 やゝ、あたゝかに。
のぞみの春はちかし。
のぞみの春はちかし。
- 二、春の來らば よろこび多し
進みの歌を 歌ひ合さむ。
わが春待ちのころ。
わが春待ちのころ。

春進み

$\text{♩} = 100$

春進み
春の來らば よろこび多し
進みの歌を 歌ひ合さむ。
わが春待ちのころ。
わが春待ちのころ。

【第一話】

シベリヤの雪の牢獄に追はれたロシアの囚人たちにとつて、一ばんなつかしいものは、モスコの春であるといふ。

「モスコの春は緑であつた」

たゞ、それだけの言葉にでさへ、涙がこぼれるほどのなつかしきを感じたといふのである。

いつも空は灰色に曇つて、見わたす限り冷い雪氷に閉ざされてゐる——しかも、その灰色の空は晴れることはないのだ。冷い雪原は、溶けることを知らないのだ。そして、身は、總ての自由を奪はれた牢獄にあるのだもの、どうして、春の光りを、望まずに居れやう。

苦しみが深ければ深いほど、闇が深ければ深いほど、自由な、よろこびを、光を求める心が眞剣なのだ。

——われわれは長い間、わけへだての氷原に生活をして来た。不自由な灰色の空の下で生き續けて来た。

それが長かつたから、苦しかつたから、自由な、へだてのない世界、正しい住み甲斐のある世界を求める心も眞剣であるわけだ。

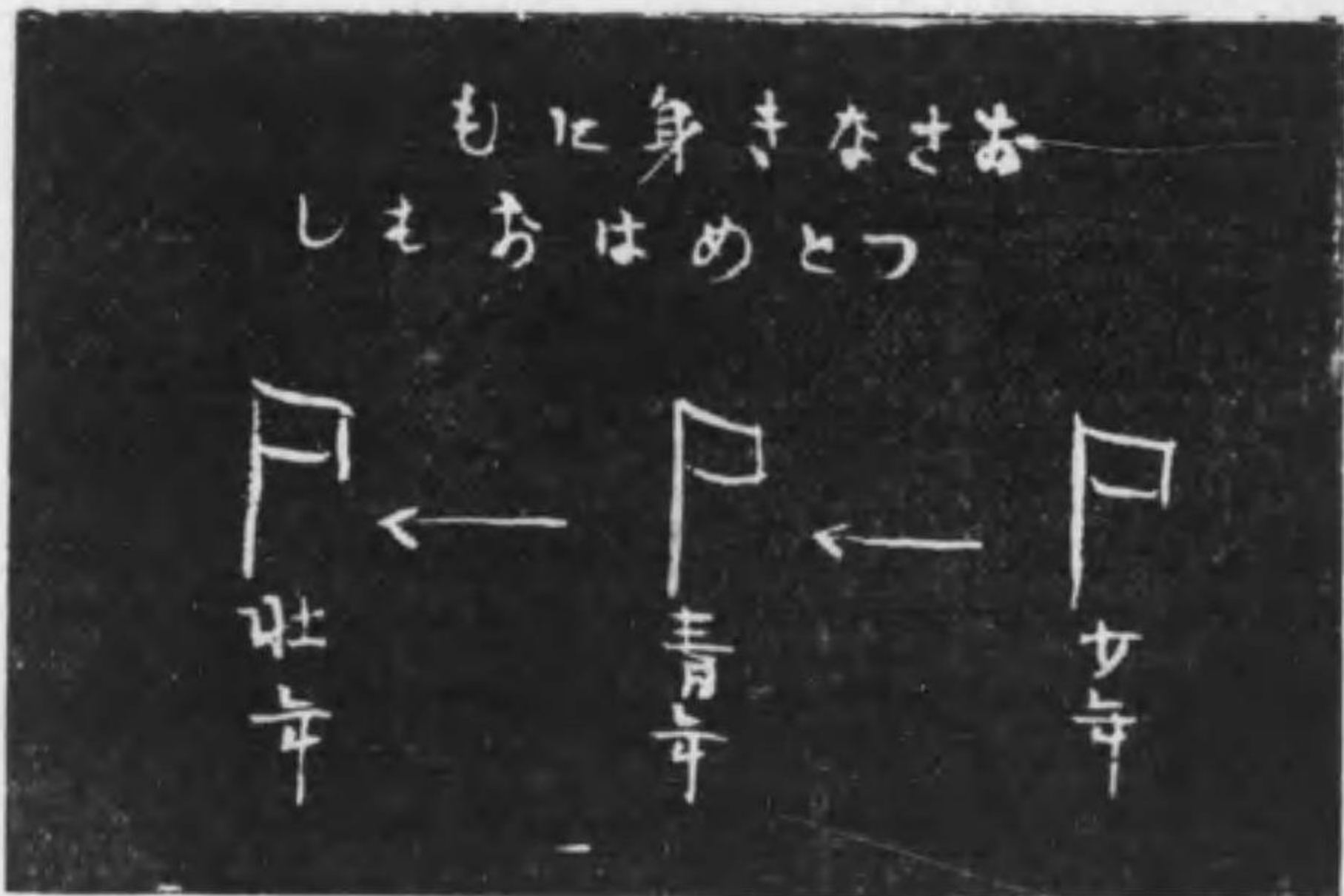
われ／＼のお父さんや兄さんたちは、このことのために一生懸命に働きつゝある。甲斐甲斐しく働きつゝある。

けれども、たゞ、その働きだけで、すつかり、世の中が正しきにかへるかどうかはわからない。あとを自分たちで引受けなければならぬのだ。

少年たちを、急激にことをなさうとする理想主義者に育てることは失望を生ませる大原因となります。失望——自棄 まことに怖い経路です。

指導者は青年融和團體の一員としての立場から話す。

團歌なり朗唱なりの精神は、時々話す必要がありません



リレー、レースをやる時に、第一走者がとてもよく走つた。第二走者がバトンをもらふことを忘れたり、バトンをもらつても走らなかつたり、走つてもものろ／＼走つたりしてゐては、第二走者としての價値はないのである。しかも、われ／＼は、今から五年七年、十年も経てば、きつとバトンをもらつて駈け出さねばならないのである。われわれの働き方如何によつて、よくもなれば悪くもなるのである。思へば、重大な責任であると言はねばならない。

僕たち融和青年團では、今、一生懸命に働いてゐる。そして、すぐバトンを諸君に渡さうとしてゐるのである。

充分な準備を、用意を整へてもらはねばならぬ。繰かへして言ふが結局、よくゆくのも悪くゆくのも諸君の今後のはたらき如何にあるのだ。

われ／＼はいつも歌つてゐる『おきなき身にも使命は重し。行く手のせめはわれ等にかゝる』と。

また、いつもの朗唱に『われらは備へむ、來るべき使命のために。新しき世のあけぼのに——』と讀んでゐる。

これを身に現し、姿に示すために、かうして少年團をつくり、度々の集りをひらいてゐるのだ、長い間、研究して来たことを、はつきりと踐み行つてゆくことこそ、何より大切であるといはねばならない

【體操】

第三教課同様のものを團長指導のもとに行ふ。

【協議】

【第二話】

意見發表、自由座談會等を行ふため、以上二つを省略する。

【意見發表】

第一班代表より順次、これを行ふ。

一人の發表がすめば、質問があれば質問を、反對意見があれば反對意見を各自から述べる。

指導者は、最後に、發表者並に反對意見者の説の何れが正しいかを温切にさし示すのである。

そして、全班代表の意見發表を終へる。

【自由座談會】

意見發表を終へて約十分位休憩して、氣分を新しくする。

圓座を組んで座る。

團長挨拶。——只今から自由座談會を開きます。どんなことを誰が言つてもかまはないのです。たゞ腹の底に深く考へて置いて欲しいことは、われわれの少年團をよくするために！といふことのために

話してほしいのです。

それから、話だけで物足りなくなつて来たたら歌つてもいゝし體操をしてもいゝし、また、何かを讀んでもかまはないのです。三四人で、短い劇を急にやつてもかまひません。

誰からでもいゝから始めて下さい。

(話が非常にはづめばいゝのですが、もし、少ない時は、指導者、又は團長に於て適當に指導しなければなりません。團長なり指導者なりが、自ら自由座談の中心になることをまでやるのです。そして最後には、指導者から批判と結論を與へるやうにするのです。)

【遊戯】

第一。雷おとし。

全員圓座。雷は中央に座り目かくしをする。

盆に茶碗を入れたものを圓座中の一人が持つ。中央の雷がピリピリと笛をふいて、すぐ、がうがう、からからと鳴り始める。

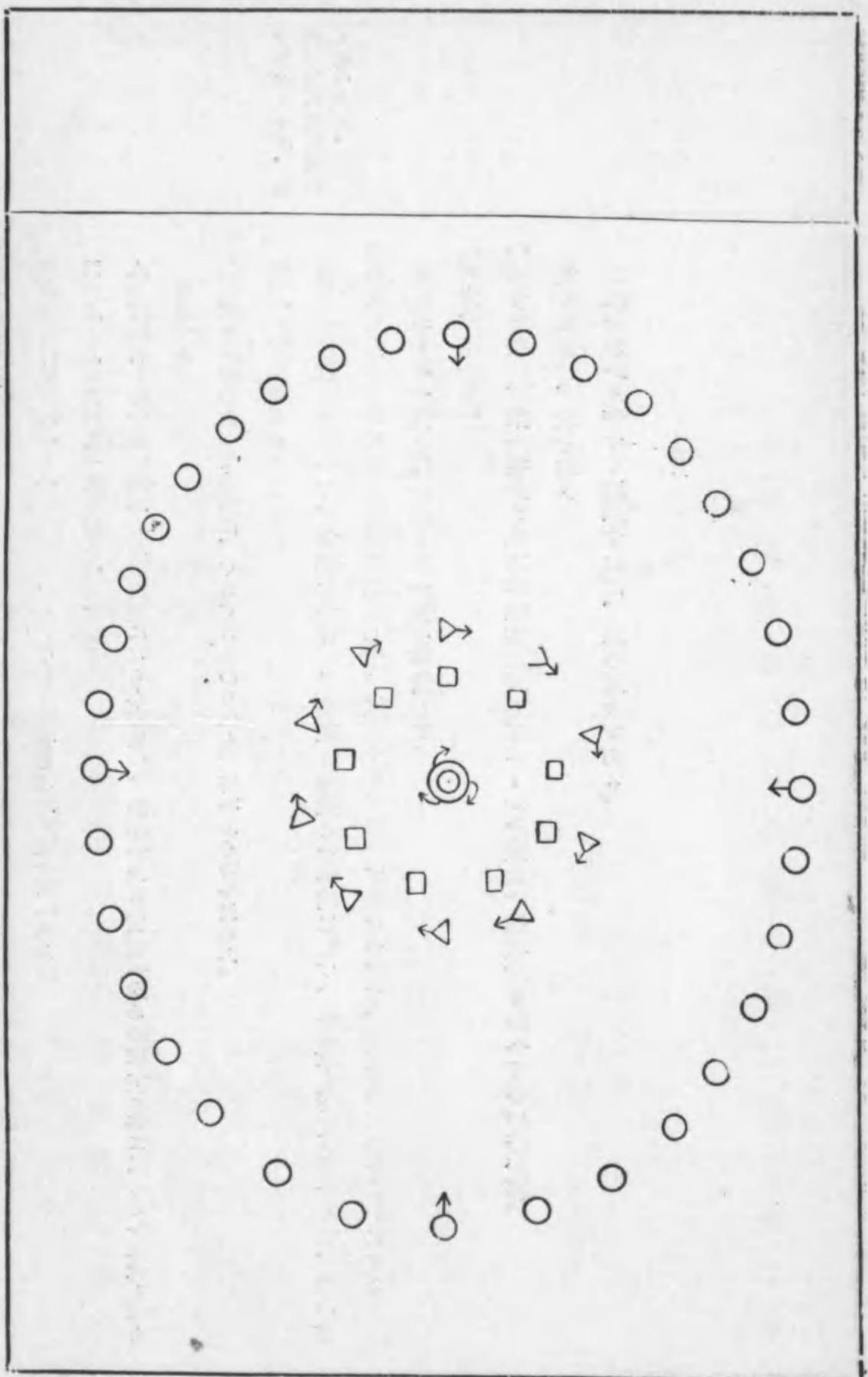
盆に茶碗を入れたものを順次左の人へ、左の人へと渡してゆく。

ガラ／＼、がうがうと高低、遅速、異様に鳴つてゐた雷がドタン！といふ言葉を發する。その時に盆を持つてゐたものが雷につかまれたものとして、中央に出る。そして再び同上を繰かへす。

雷につかまれたものが八人なり十人になり達した時は、紅白にわけて、腕角力を行ふ。

第二。座布團取り。

再び雷落しによつて、八人なり十人なりの人を選び出す。
 十人の場合は座布團を九枚、八人の場合は七枚を丸くならべて、指導者がその中に立ち、選ばれたものが、その座布團の周圍に立つ。
 「前に進め！」といふ號令と共に座布團の周圍を歩いてまはる。此の時、全團員は、軽い歌を歌つて手をたたく。
 指導者が、急に、笛をふくと、みんな一せいに座る。座布團が一枚足りないから座りおくれたものは座れない。敗北者として自席にかへる。
 次に座布團を一枚減してこれを行ふ。最後まで、座布團にはぐれなかつたものが最優勝者として、みんなから、稱讚の『高唱』をうけるのである。
 圖示すれば左の通りである。



千鳥ボールは、室内、室外共に面白く行へます。

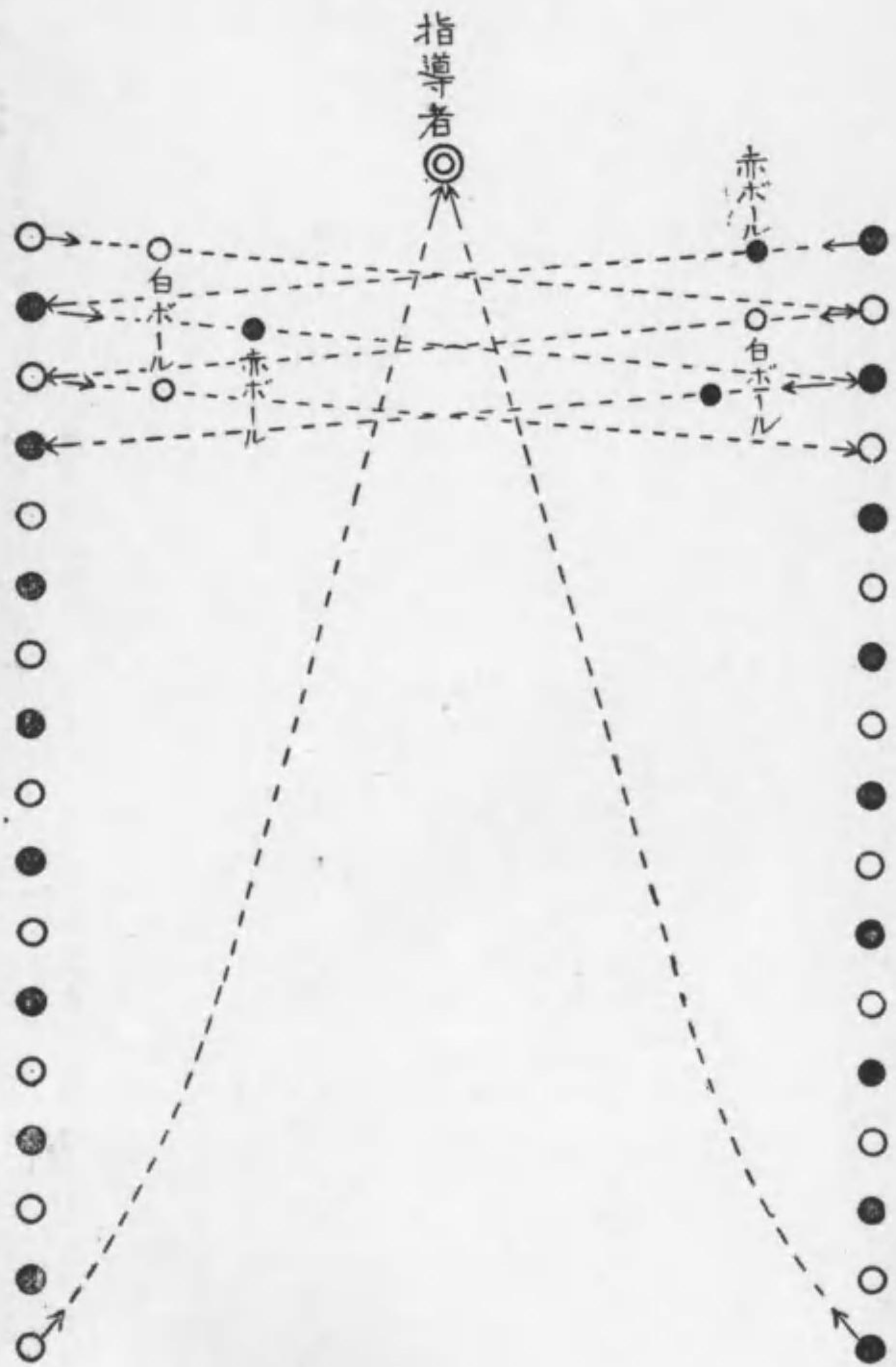
○ 全團員は四座をつくつて内側をむく。そして拍手しながら軽い歌を歌ふ。
□ 座ぶとんを九枚丸へ敷きならべる。
△ 選ばれたもの十名が座ぶとんの周圍にならんで立つ。指導者からの「前へ進めの號令と共に足もとを注意し乍ら前進する。

○ 指導者が笛を持つて中央に、ぐるぐるまわり乍ら、笛をふく時を知らせる。
第三、千鳥ボール。

全員を同數にわかつて、番號をつけ、奇數と偶數とを鮮明にして、恰度千鳥になるやうに、右の方の奇數を左の方の偶數とを同じ組にして、紅たすき、白たすきをつけて、敵味方をあきらかにする。赤いボール一個と白いボール一個を準備して、

「用意、始め！」
の號令と共に、第一番から先方の味方に對してボールを送る。領次送り終へて早い方が勝。負けた方は、歌を歌ふ。
これをわかりやすく圖示すれば、左の通りである。

ボールがうまく相手のところまでとどかない時は投げ手が走つて行つて自席にかへり、何回でもなげる受け手は動かない。



【揭示】
前同様。



細いみちをたどりたどってゆくのです。
 目的地は 是るかに遠いけれど
 決して 力はとしません。
 みんなで元氣よく歩きつづけるのです。
 落葉のつんだ 淋しい 道にも
 一やがて
 緑の春がくるのです。
 温い 温い春が 此の道の ばてに
 ついてゐるのです。
 一歩 一歩 力にみちた望みの足どり
 なのです。

兒童融和教育に必要な準備品

- 一、きょうだいカード
 兒童融和讀本とも稱すべきであつて、現在製作準備中。
- 二、團の日記
 形式は一般掛紙で、ペン字を書くことが出来るものであればよい。
- 三、指導者手帖
 指導者が、團員には見せないで持つてゐる手帖（別表（1））
- 四、團員名簿
 一人一枚のカード式のものにし、取はづしを便にして置く。（別表（2））
- 五、團員出席簿
 別表名簿を兼ねたものでよいわけであるが、別に作製して置く方が便利である。（別表（3））
- 六、兒童融和教育基本調査
 事情がゆるすならば、基本的調査をして置くことが、一般兒童融和教育といふ點から言つても、内部兒童のカルトといふ點から言つても、まことに必要である。（別表（4））
- 七、簡単な運動具
- 八、簡単な圖書箱と圖書

簿 名 員 團 (2) 表 別

下記別表中「第班」は順次轉班の時に上欄を抹消し次欄に記入する

○	○	
大 字	電 号	
氏 名		
入 團 年 月 日	役 員	
記		
入		
備		
退 團 年 月 日		
第 班	第 班	第 班

帖 手 者 導 指 (1) 表 別

狀況向轉格性	點 缺	所 長	族 家	班
考 備			員 役	
			態 狀 濟 經 庭 家	名 氏
況 狀 活 生 る け 於 に 團		入 團 年 月 日	狀 生 け に 家 況 活 る 於 庭	續 る 於 校 小 成 け に 學
				月 日 年

同覽紙の一例
勿論、團員の手によつて、たんに書いたもの一枚だけをつくる。寫眞は、雑誌、新聞などから切りぬいてはればいゝ。別に同覽の順序をかいたものを貼布しておくこと。紙質は同覽にたへる堅いものを必要とする。なるべく大きく、多量に記事のはいるやうにすること

少年團 シンブン

缺席するな

- ◇此の頃、例會に缺席するものが多いやむことは一ばんいけない。
- ◇休むと、ごんな大事な協議があつても賛成だとも不賛成だともいへない
- ◇また、ごんないゝお話があつても聞けないのだ。
- ◇缺席をするな。一人も缺席をするな。全團員四十八名みな健康な顔にならべよ。

銀杏の葉
きんいろの小さな扇 いてふの葉ひらく
くひらとおちてくる。
十一月の秋ぞらの
背いにそまれば背いのに
どうして、きいろくなつたのだ。
岡田千夫



門はひらかれてゐる。
元氣に訪れてゆかう。
友は待つてゐるのだ。

×
門はひらかれてゐる。
元氣に訪れてゆかう。
眞剣に語り合ふのだ。

×
門はひらかれてゐる。
元氣に訪れてゆかう。
僕らは力で一ばいだ。

人といふ字は、もちつもたれつといふ字ださうな。人といふことはひとしい、高下がないといふ意味ださうな。
— 龜山英雄 —
— 朝がほ —

朝がほ
田所義一
あさがほ秋でさむいのか。
白いゆかたがさむさうだ。
だんだん小さくなつてゆく。
あさがほ秋でさむしいか。
つゆのなみだでなきさうだ。
だん／＼花もひらかない。

十二月の例会

ひらく日は十六日
ひらく時間は午後六時半ひらく
ところは、青年會館、大事な相談がある。
缺席するな。

シンブン當番より。
ぼくらの新聞は、もつとうまく出るつもりだつたが駄目だ。此の次にはすばらしいものをつくるよ
山田清一、須川秀夫

昭和七年五月十五日印刷
昭和七年五月二十日發行

◁ 定價二十五錢 ▷

發行所

東京市麴町區大手町一ノ七

財團
法人

中央融和事業協會

振替口座東京七〇〇八六番

發行所
印刷所
印刷所

赤堀 稲文
赤堀 葉社
赤堀 仁有
赤堀 三印
赤堀 太郎
赤堀 郎所

終

